
さあ人生を楽しもう

たんそくレトリバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ人生を楽しもう

【Nコード】

N4287Z

【作者名】

たんそくレトリバー

【あらすじ】

平和で無害に生活していた男が気がついたら異世界に、
だけど気にすることもなく異世界で平和に生きていく話。（本人談）

だが男の非常識な行動に異世界の人間、魔族問わず巻き込まれていく。

自重？なにそれおいしいの？を合言葉に好き勝手書きます

ギャグやらバトルやら悪知恵やらいろいろ詰め込むつもりですが、
なにぶん初投稿なのでいろいろ不手際があると思います。それでも
良いという方はどうぞご覧ください

第一話 千本ノックと閃光魔術

なんかいきなり目の前が真っ白になった。

何だよ誰だよいきなり俺の目の前で閃光手榴弾破裂させた奴、
こんないたいけな一般人に非常識なもん使っんじゃねえよ

ちよつと豪華客船に潜入して乗組員簞巻きにして海に放り投げたり
半殺しに

したくらいで大げさすぎだろーが、もうちよつと常識つてもんを考
えろよ。

やった奴出てこいよ、千本ノック（守備位置バッテリーとの距離3M
以内）で根性
叩き直してやるからよ、

とかなんとか考えてたらようやく視界が回復してきた。

さあて、どんな仕返しがいかなあ。

直径10Mくらいの無人島見つけて素っ裸で置き去りにしてやろう
かなあ

（男2人のペアで）

10日もたてばアーツ！な関係になってるかもしれんなあ
まあ気持ち悪いから迎えになんて行かないけど。

少しづつ視界が開けていく中、俺はそこでふと視覚以外の五感で違
和感を感じた。

おかしい

さっきまでしていた潮の香り、波の音が消えている

肌を感じていた風もいきなりやんだ

自分は間違はなく船の船首甲板にいたしここは海のと真ん中だ
突然船の揺れが止まるはずもない。

どう考えてもおかしい

有り得ない事態に本能が警鐘を鳴らし即座に行動できるよう体勢を
整え

周囲への警戒レベルを最大まで引き上げつつ視力が回復するのを待
った。

そして視覚が完全に回復してその違和感は決定的になった。

「は？」

隣から間抜けな男の声が聞こえた

なぜかそこは船の上ではなく石造りの大きな部屋の中央だった。

「な、なんだ、何が起きたんだ！」

隣の男が騒ぎ出す

身なりからして高校生くらいか

ぱっと見かなり整った顔をしている

身長は170位、スマートっていう言葉が良く似合う体格をしている

少なくとも女に困ってることはないな
きつととぼけた顔しながら何人も泣かせてきたんだろう

こいつがさっきの閃光^{スタングレネード}手榴弾の犯人だろうか

おそらくこいつが犯人だろう

いや、こいつが犯人に違いない

てゆうか犯人ということにしよう

イケメンは何時如何なる時、どんな状況でも俺の敵だ、

よし、あとで閃光つながり^{シャイニンググワイザード}で閃光魔術をかましてやろう
ついでに額に油性ペンで巨乳と書くことも決定だな

べ、べつに私情で犯人て決め付けてるわけじゃないんだからね!!

まあそれはいいとして(後でやるから)

問題はこいつらか

そう思いつつ部屋の壁伝いにぐるりとこちらを囲んでいる集団に目をやった

なぜか全員中世にタイムスリップしたような格好をしている

全身を覆う鎧を着て槍や剣を持つ兵士達

絵画から抜け出てきたような貴族風の男女共

隣の男以外全員がこちらを凝視している

何だよ、なんか用かよ

イケメンと一般人を比較して楽しいか？

TVの整形手術のBeforeとAfter見比べてるつもりか？

ふざけんなよ、Beforeにも心はあるんだよ！

何が悲しくてあんな無表情になるか！

Afterを誇張しすぎなんだよ！

Before役の人の気持ちもっと考えてやれよ！

とかなんとか考えていたら

「よっこそ勇者様」

何時の間にやら俺ら二人の前に高そうなティアラを頭に付け

金持ちがでかいパーティでしか着そうのないドレスを着た

いかにもな王女サマっぽい女が立っていた。

お前がりポーター役か？蹴りかましてやるうか？

そう思いながら俺は同時に健康通信販売TVの

Before役の人達にメールを送った

第二話 何事も礼儀は大切です

「は、はい？」

隣の男がわけが分からないという顔をしながら王女サマっぽい格好をした女に顔を向ける

「初めまして勇者様、私の名前はエクレール、エクレール・フォン・バウムと申します。ここ」

「バウム王国の第一王女でございます」

「ぼ、ぼくは鷺沼英人さぎぬまひでこといいます・・・て、ばいむ？聞いたことない国

ですけどそれってどこにある王国なんですか？」

「ご存知ないのも仕方ありません、ここはあなた方が居た世界とまったく違う世界で・・・」

「え、ええー！それはいったいどういうこと・・・」

「それは・・・」

横でやってる会話に適当に耳を傾けつつ、俺は周囲の状況を確認していた

周囲の人間の数はざっと見4〜50人はいるがこちらとは距離をとっている。

多少警戒してるみたいだな。

近づいてきたのは王女サマのみか、

地面には魔方陣っぽい模様があり俺と鷺沼とかいう男はその中心に

いた

「つまりこの世界には魔神を頂点とした魔族っていうのが人間の生活を脅かしている？」

「はい、そしてその魔族の脅威から我々を救ってくださる勇者様があなた方なのです、

どうか力無き私たちの希望の光となってくださいませ」

「い、いきなりそんなこと言われても」

大抵こういう奴は結局引き受けるんだよな、んで魔王だか魔神だかを殺ったあと

「姫……」「勇者様……」「とかいつてくっついてハッピーエンドって流れが王道だよな

けどまあ現実はその甘くなさそうだし

でもいまの俺はそんなことどうでもいいくらい重要な問題が発生し、人知れず頭を抱えていた。

腹減った

そついあ今日ろくに喰ってねえや

せつかく豪華客船に乗ったのにせいぜい見たのはパイナップル（手榴弾）くらいか

まあフルーツは食いたくない気分だったから投げてくれた人の口の中に

丁重にお返ししたけどな（トルネード投法で）

なんかえらいさわいでたなあ、そんなに俺の丁寧な対応に感動したんだろうか

感動しすぎて爆発してたしな、感動は爆発だ！っていう人なんだろう
礼儀は人間関係を円滑にする重要な要素だからな、俺ほどの人間だと
学ばなくとも自然とできてしまうのだよ

しばらく二人の会話が続けていたが

「わかりました、できるかぎりやってみます！」

という勇者サマの一言で場に歓声が広がった。

「おお」

「なんと凜々しい」

「これで世界は救われる！」

てな具合にね

ふむ、んじゃまあ場もいい頃合だしそろそろこいつらの本性暴く
しますかね

「あー盛り上がっているとこ悪いけど、あんた重要なこと
言っていないぞ」

今まで沈黙を続けてきた俺の言葉に少し驚いた表情をしながら
鷺沼とかいうのと王女が同時にこちらに視線を向けた
ていうかこいつら俺の存在に気づいてたのか
無視されてるからまったく気づかれてないのかと思ってたぜ
イケメンといい女てのは違う次元に居るのかと本気で
思ってしまうところだった。

「俺たちを元の世界に戻せるのか？」

俺の一言で場が静まる、そして一部の人間から俺へと向けられる強い一つの感情

あ、感じてる！ワタシ、感じちゃってる！！（殺気を）
こ、こんなにたくさんの人から感じちゃうなんて！！（殺気を）
く、くやしい！でも感じちゃう！！（殺気を）　ビクンビクン

王女はさっきとは違ってかわってなかなか言葉を発しない

「そ、それ「もちろんですとも！！」

王女の言葉を遮る馬鹿でかい声の主はそういつつこちらに近づいてきた

「あなた方をもと居た世界に帰すこと、これは当然できます、
ですがそれにはしばらくの月日が必要でございます、
異世界の扉を開けるには色々準備が必要です、
申し遅れました、私はここバウム王国の大臣をしているものでござ
います」

そう言って深く頭を下げてきたメタボ爺さん、（名前名乗ってたけ
ど忘れた）

うーむ、まずそうだな、焼く前から失敗確定だろう、喰ったらスタミナダウンしてしまう。マンガ肉どっかに落ちてねーかな、異世界なんだしそこらへんにぼろっと落ちてそうなんだけどな。

「もし勇者方様がご帰還を希望されるのであれば、残念ではございますが元の世界へお送りいたします、ただ先程も申しましたように異界への扉を開けるには有る程度の時間が必要でございますのでその間は王国で貴賓待遇で対応させていただきます」

「へー」

つまり帰す方法はない、そして断るなら還す（土に）ってことかな、さてどうしようかな、

まあ取りあえず飯食わせろ、話はそれからだ
腹が減ってはアーツ！

また感じる！ワタシスツゴク感ジチャツテルウー！！！！（殺気を）

第三話 イケメンの顔は潰す為にある

というわけで、やってきました玉座の間

目の前にはロープレでよく見る玉座に座っている王冠かぶった
ひげもじゃジジイ、そして部屋にはさっきの取り巻き共もきている
ちなみにさっきの姫さんはジジイの横にいる

「おぬしらが召喚された勇者か」

された、じゃなくてためーらがしたんだろうが
なんて本音は当然言うわけも無くここでも俺は黙っていた

「はい、私は鷺沼英人といいます、この世界の平和の為、
できうる限りのことをするつもりです」

俺が黙っている理由は二つ

ひとつはこつという堅苦しい空気が嫌いだから
こついうところはイケメン君に喋ってもらってたほうが絵になるだ
ろう

「うむ、よくぞ言ってくれた！おぬしの活躍に大いに期待している
ぞ」

そしてもうひとつは俺がシャイボーイだからだ

こんなたくさん人が居る中でなんか話すなんてめんどk・・・

シャイな人間にできるわけないじゃないか、初対面の人には恥ずか
しさの余り

もれなく目潰し、金的、延髄蹴りをしてしまう俺には難易度が高す

ぎるのだよ。

というわけで王様へのお披露目もすんだのでさっさと部屋を出

「では10日後に早速魔神の住む魔神城におぬしらを連れて行くので準備しておくように」

ようとして足を止めた。

ん、んん？今このジジイなんつった？10日ゴ？マジンスムシロ？
大魔神の住む家なら東京のどっかにあると思うよ？

ピンポン押したらフォーケボール飛んできそうだけど

「え、ええ！！いきなりですか！？」

イケメン君が驚く、無理も無いな、素人が元とはいえ
メジャーリーガーを相手にするのだ。本気出されたら三振の山を
積み上げることしかできないだろう。

唯一の勝機はブランクによるスタミナ切れを狙うことか。
もしくはバット持ったの乱闘か

「む？もしやまだ説明しておらんかったか？」

「初めて聞きましたよー！」

「そうかそれはすまなかった、なに、心配はいらぬ、
何も魔神を倒してこいといっているわけではない」

長々とジジイの説明が続いたのでまとめると以下のようになる

・ 召喚された人間が魔神城に漂っている魔力に触れると
なにやら強い力が目覚めるらしい

・ 目覚める力は人によって違うのでどんな力かは
目覚めてみないと分からない

・ この世界の人間が魔神城の魔力に触れてもなにも起きない

・ 魔神城には特殊な魔法具を使って俺たちだけを瞬間移動させるら
しい

・ 一定の時間（説明からして約1時間程度だと思う）が経つと

自動的にこちらに帰ってこれるらしい

・城にいつても魔族と戦ったりする必要はまったくない

・魔族に遭遇しても召喚されたばかりの人間には不思議な力が働いており、あちらは手出しできないらしい。

ただしこちらがあちらに手を出すとその効果は即失われる。召喚されてから約15日経っても効果は失われる。

・すぐにあちらにいかないのは、まずこの世界の空気を体に馴染ませてからでないにあちらの魔力に触れた瞬間、体がやられてしまうかららしい

つまり行って特に何もせず帰って来たって事らしい

説明が終わり、今度こそ部屋を出た

イケメン君は姫さんに呼び止められなにやら話していた、

おそらくすでに堕ちているんだろう

ああいうのは何もせずとも女を堕とすからな、

天然のジゴロって奴だな恋愛ゲームの主人公によくあるタイプ、

隙を見て今度顔を潰してやろう。

その後なんか個室に案内されたのでそこで用意した食事
(マンガ肉は無かった、残念)を食った後、俺は考えていた。
んー、なんか今日一日色々あったけどどうしようかなあ、
丁度あつちの世界は色々めんどくさくなってきてたんだよなあ
この世界は魔法やら何やら色々おもしろそうだよなあ
もとの世界には多少心残りはあるけど、本当に少しだけだしなあ

具体的には来週の週間少年本読んでおきたかったとか、
アレやそれ系の本処分しておきたかったとか、俺の属性が
分かってしまふあんなDVDを処分しておきたかったとか

まあ帰る方法も探せばあるだろうけどここで生きていくのも
楽しそうだしがんばってみよう！

さて、取りあえずは10日後に魔神城に行くんだけど・・・
せつかくこんな序盤にラスボスの城にいけるんだし、
ただ行くだけじゃあつままないよなあ？

よーし、挨拶代わりにお城の“お掃除”をしてあげるとするか
そうと決まれば明日からさっそく行動開始だな。
10日の間に色々準備しておくとしてよう
うーん、俺ってなんてやさしいんだろう
聖人君子も俺には及ばないだろうな

そのときその部屋に誰かがいたら、間違いなく背筋が凍り、恐怖で心臓が止まっていただろう。

蛇に睨まれた蛙のようなかわいいものではなく、

それこそ魔神に睨まれた何の力も無い子供のように

それほどに彼の表情は

冷酷、冷血、冷徹、残忍、残酷、残虐、極悪、非道、そのすべてを

孕んだ

満面の笑みをしていた

「さあ人生を楽しもう」

第四話 世界は矛盾とシンデレラでできている

とりえずあず次の日、来るべき“お掃除”のために色々と準備するため町にやってきました

そうそう、めんどくさくて（書くのが）色々説明してないことがかなりあるので（ ）の文字はなんだろうね、目の錯覚かな？）

今のうちにしておこう

まずこの世界の名前はウルジアというらしい

金の単位はGユーロ
ペナ

言葉は日本語で通じてる、勝手に翻訳されてるみたい
ちなみに字も日本語で書くと勝手にこの世界の文字になるし、
なぜかこの世界の文字も理解できる。

どうやらこの世界に來るとその辺の知識が
勝手に脳内に入るらしい

文化はまさにロープレな中世的かんじ
武器や防具が普通に売られており、ごつい鎧着た人が
ガチャガチャ音を立てながら歩いていたり
弓持った狩人みたいな人もいる。

市場もあり少なくともこの町は活気があるようだ。

おばはんが大きな声を出しながら売り物の果物っぽいもの
行きかう人にアピールしてたり、道具屋っぽい人が自分の薬っぽい

のを
客に説明してたり、あっちこっちでワイワイガヤガヤと喧騒が聞こえる。

さて、ではこの世界の肝となる部分を説明しよう。

この世界の生物はワーク（以下WK）と呼ばれる潜在的な職業を持っているらしく、

俗に言う「ジョブ」とはまったく別のことを指している、

この世界での「ジョブ」とは、その人が就いている職業の事を指すこと

に対しWKはその人が持つ潜在能力がどんなものを分かりやすく職業で表したものの、という感じ

例を挙げてみよう

商売大好きで商人になったがその人のWKは戦士系だった

その場合、その人は戦士系の才能である力や体力に大きな可能性を持ち、逆に

商人として必要な計算や話術等の才能はあまり見込めないということだ

つまり商人としては大成しにくいということである

ただそれを分かっているながらこの人のようにWKとジョブがちぐはぐな人が

けっこういるのだ。

まあそれには理由があるのだが後で説明する。

話がずれたがこのWK、結構深くできているらしい
まずWKはランク制になっているらしく

C B A 特A S 特Sというのを基本としているのだが
Cが一般的な職でAから上のWKはめったにいない、
ということ以外未知数らしい。

何しろ才能というものはそれこそ千差万別、人の数だけ存在するの
だ。

現在確認できているWKだけでも軽く3万は超えているが、

(そのうちのA以上で確認できているのは1割満たない) 未確認W
Kの

情報もかなりあるようで

総数は全く把握できないらしい。

しかも同じWKを持っている人でも成長や特徴がまったく違ったり
もする

さっきの戦士を元にロープレ風に例を挙げると

WKが同じ戦士系でジョブも同じレベル20のA、Bがいるとして、

Aは力が高いが技術が未熟、

Bは力は弱い、技術に長けておりAの使えない技も使える

と、こんな風にまったく違うタイプの戦士がいたりする。

つまりWKは文字どおり人の数だけ存在し、且つ同じだったとしても
一人として同じ能力、成長ではないのであくまで目安程度にして
おくとよい、ということになる。但し特定のWKやジョブでしか
覚えられない技や魔法もある

さて、では次にそれだけ大量にあるのにどうやってランク分けをして

いるのか？ということになる

答えは簡単で、道具、ていうか石を使えば良いらしい
「ハロー石」と呼ばれるもので、結構一般的なものらしく
これを両手で握り締め、約2分待つと石の色が変化するので、
その色で判断できるらしい。
未確認のものもこれでランクの判別が可能。

C 白 B 黒 A 銅 特A 銀 S 金 特S 虹

とこんな感じらしいのだが例外として、
このランクに入らない特殊なWKが
2種類存在する。

1つは犯罪者、これは犯罪を犯した人に追加されるWKで
これを所持している間は、人間としては扱われず、法により守られ
ることも無い、

且つ犯した罪によって大小の賞金がかけられる。
これを消去するには自身にかけられた賞金の倍額を専用の施設に
納めなければならぬ。尚、これを所持している間ハロー石は
その人の元々所持しているWKに関係なく必ず灰色になる

もう1つは固有WK、これは極めて稀なWKと認められたもので
ある種族しか持たない、特殊な育ち方をした等、普通の方法では
付くことがないWKである。このWKはものによっては特Sを超え
るもの
もあるらしい。又、このWKの場合ハロー石は上記以外の
の様々な色に変化する。

方法、といったのはWKはその人の鍛錬や思想、

生き方によって後天的に変わることがあるのである

CからBに上がったりもすれば、逆に下がったりもする
同ランクの全く違うWKになったりもするらしく、
その際WKの名称も当然変化する。

魔法使い 賢者 戦士 商人のように

つまり最初の例にしたWKが戦士系の商人も後に
WKが商人系に変化する可能性がある、ということである。
例の商人のような人はこれを期待しているのだ、
もちろんそうでない物好きもいるだろうけど

もつとも、全く違うWKになるには、ランクを上げるのと同じくらいの
時間と鍛錬が必要になるらしい。

ただ、ランクの変化にも個人差があるので、
あつけなくランクが上がったり変化したりもすれば、どれだけ鍛錬
しても
現状のままという人もいる。

ランクが上がると潜在能力の限界値と能力の上昇率も上がるが、
能力自体が上昇するわけではないので、必ずしも高ランク所持者が
低ランク所持者より優秀とは限らない。

そうそう、俺らが召喚された理由もこのWKにあるらしい。
召喚された人間は例外なくWKが初期から高位らしく、
且つ、ランクアップも極めて早いらしい。

だが、以外なことに今までに「勇者」というWKを持った
人間はいないようで、戦士系や魔法使い系の上位系統が

ほとんどらしく、そのWKに合わせて仲間やジョブを決めていたそう
うだ。

ちなみに「アンサー」という魔法を使えば、その人の
WKやジョブが分かるらしい。

ただ、召喚された人間は力を目覚めさせないとWKとそのランクが
分からないとのこと、魔神城に行くのはそのためらしい。

そしてジョブを変更する方法はWKよりも簡単で、

一般的にはレキ符という道具を使う。

使い方はなりたいたいジョブを書き、ハロー石と同じく両手で2分包む、
すると裏にそのジョブなるための条件が書かれるのでその条件を
満たせばいいが、条件は人によって全く違う。

ただしレキ符を使ってもなれないジョブもある、その場合は、何か
別の条件を満たす必要がある。

(なれないジョブを書いた場合レキ符には何も書かれない。)
ジョブのほうにも固有のものがあ、ある種族にしかねないもの
や、

大きな活躍をしてなったりする、だがWKほど総数は多くない。

(ジョブ自体の総数がWKより遥かに下回るのが理由)

ジョブのランクは

一般職 中級職 上級職 最上級職 例外固有職

となっており上にいくほど能力に高い補正がかかるとのこと
ちなみに一般職からいきなり最上級職にクラスチェンジ
したりするのは不可能。一つ上にしかできない

あと、自分が装備できる武具はジョブによって決まっている。
戦士系のWKを持っていても、ジョブが魔法使い系なら
魔法使いの装備できるものしか身につけられない、
ということである。

長々と説明してしまったがこれを聞いた大抵の奴はこういうはずだ。

なるほど、わからん！！と

心配するな、俺もわからん。

まあそんなのがあると思ってくれてればいい。

長すぎて何言ってるか分からなくなったりしたしな。

矛盾とかあっても、それは俺が間違えて覚えたことだろうから
気にしないように。

なぜなら世界は矛盾で満ちているのだから。

と、締めたとこで説明はここまでにしとこう。

あとは追々していくので楽しみにしておくように。

さあ買い物買い物

べ、別にめんどくさくて投げたわけじゃないんだからね！

第五話 誓いは犠牲を払ってでも守るべし

なーんか面白いもん売ってないかなあ、
とうろついた結果、なかなかいいものが売っていた。

結構一般的に出回っている物のようで、ジジイ王から
もらった金額で十分買えるものだった。

そしてあつという間に10日たち、今俺は魔神城にいる。
使われてない古い空き部屋に飛ばされたらしく魔族側には気づかれ
ていない。

隣には勇者サマも一緒にいる。
そついあ勇者サマは俺よりかなり多く金を王サマから貰っていたら
しく

さらに国に伝わる由緒正しい剣や鎧などもいただいたらしい。
おかげで今の俺らはパツと見英雄とただの一般人に見える。
俺は武器も防具もつけてないからな。

ただまあ、なぜかこの勇者サマ、今大の字になって寝てるんだよね。
まったくこんなところで寝るなんて信じられないな。
なんで寝てるのか俺には分からんがみんななら分かるかも知れない、
さつき起きたことを思い出してみよ。

こちらに飛ぶ前から話してみよう。

「ヒデト様、どうかくれぐれも無茶はなさいませんように。」

「大丈夫ですよ、時間が来るまで大人しくしていますから」

と、両手を掴みながら見詰め合う姫とイケメン、共に顔が良いだけに絵になっている。現在地は最初に召喚された石造りの部屋（儀式の間というらしい）の魔方陣の上にいる

「ではお二人とも、これに触れてください」と姫の後ろに控えていたローブを着た魔術師のような奴が差し出してきたのは、サッカーボールくらいの水晶球だった。水晶の中心にはなにやら城のようなものがおぼろげながら見える。名残惜しそうにイケメンから離れる姫、そして俺とイケメンが水晶に手を置い

たと思つた瞬間に別の場所にいた。石造りなのは変わらないが部屋が小さくなっておりなんか埃っぽい、部屋の隅には蜘蛛の巣が張つてある。何より充滿している空気が明らかに先程と違う。空気に体全体が圧迫されている感じ、確かにこれは慣らしておかないときついだらうなあ、と周りを見ながら思っていた。

「うん、ここなら大丈夫そうだ、時間が来るまでここに隠れているのが良いと思うんだけどどう？」

と言いながらこちらに顔と体を向けてくるイケメン君の右膝の上には

「え？」

なぜか俺の左足が乗っついていて、

そのまま俺は階段を駆け上がるかのように右膝を体ごと地面から蹴り上げた、
すると右膝は吸い込まれるように

「ぐあっ！」

イケメン君の顔面にHITした。

見ててくれたか、世のモテない男子諸君、俺はやったぞ、君たちの怨敵を一人片付けたんだ。
これで世界は一步平和に近づいたんだ！

俺は一度した誓いは守るのだ、例えそれがどれほど理不尽であろうとも！！

自分の浮いた体が地面に着地するまで俺は満足感に浸っていた。

だがそこで俺は自分の大きな過ちに気づいた

「ぐうっ、なんということだ、油性ペンが無い！！！」

これでは誓いを果たせない、額に消えない傷（巨乳）を残すことができない！

俺はがつくりと膝を落とし、両手を地面につけた。

みんなすまない、俺の不手際でこんなことになってしまった。何でもっとしつかりと準備を整えておかなかつたんだ！

俺は自分を許せなかつた、千載一遇のチャンスを生かせなかつたのだ。

「だが、俺はあきらめない！これでどうだ！」

取りあえずそこらへんに落ちてた棒を鼻に二本突っ込んでおいた。

そして話は冒頭に戻る

どうかな、わかつたかな？

分かつた君はおそらくIQ300はあるはずだ。

おそらくこれはフェルマーの最終定理クラスの難問だからな。まあ俺はフェルマーの方は分かるがこれは全く分からない。

仕方ない、ここは安全そうだしそもそも魔族は手だしできないんだし、

ここで寝てても大丈夫だろう。

俺はお掃除をしなければいけないので行くとする。

ゆっくり扉を開けたが外には誰もいなかったので辺りの気配を伺いながら

部屋を出た。

どうやらここは地下のようだな、辺りは薄暗く、

すぐ近くに階段がありそこから少し光が指している。

さて、んじゃまあ行くとするかな

俺の潜入技術スニッキングと買ってきたあれらを使い

見事にお掃除を完遂して見せる！

「うむ、異常なし」

と、魔族Aは今日も自分の持ち場の見回りしていた

彼は魔神城の中の魔族で一番下の魔族を統括している立場にある。

本来なら割り当てられた部屋でのんびりできる立場なのだが

生来の生真面目な性格のため、自身も持ち場を持ち、見回りをして
いるのである。

彼はまだ知らなかった、これから起こる大事件の一端を自分が
担うことになることを。

第六話 魔神城（笑）

その日も魔族Aは異常がないことを確認しつつ、いつもどおり見回りをしていた。

すると少し離れた所にある曲がり角から、見ない顔の下級魔族の姿が見えた。

こちらから声を掛けようとしたとき、向こうがこちらに気づいて、慌てた様に小走りしながら近づいてきてこう言った。

「はぁ・・・はぁ・・・は、初めまして、わ、私。ついせ、先日、城の警備に

は、配属されたもので、ふう・・・はぁ・・・、今色んな方々にあ、挨拶に伺って

いる所です・・・ふう・・・ふう」

ふむ、新入りか、私は城にいる下級魔族による警備の指揮を執る立場ではあるが、下級魔族を自分で選んで城に配属させることはできない。当然だ、ここは魔神の住む城、すべての決定権は魔神様にある。ということはこの下級魔族も魔神様の御目に留まり、城の警備という誉れ高い役目を賜ったのだろう。

だがどうやら走り回っていたらしく、息もたえだえに話をしており、肩も上下させている。相当あちこちの挨拶回りをしたんだろう。

「そうか、私はお前を指揮する立場にあたるものだ、これからは私の指示に従うように・・・しかし見回りをする前からその様子では心もとない、少し休憩してくるといい」

かなり疲れている様子だったのでAはそのように声をかけた、しかしその魔族は、

「い、いえ、それよりも重大なほ、報告が・・・はあ、ふう」

と、言葉を返した後、その魔族は呼吸を整え、息切れを落ち着かせはじめた。

Aもその方が報告とやらを聞きやすいと思い、落ち着くのを待った。そしてようやく落ち着いたので魔族はゆっくりと話し始めた。

「先程も申したとおり、私、先日魔神城に配属されたばかりで、今の今まで城の方々にご挨拶をしていたのでございます、すると先ほど　　を守護しているあの御方・・・えーっと」

「ギマルツ様か？」

「あ、はい！そのギマルツ様をお見かけしたのですが・・・」

ギマルツ様が。

数々の人間の強者、勇者を何人も屠り、最強の魔族の一人に数えられている。

魔神様の信頼も厚く、直々に「勇者殺し」のWKを与えられた御方。その腕を振れば海が割れ、その足を動かせば大地が震える。

最強レベルの魔法をいくつも使え、さらにその身には最高の武具を着けている。

まさに魔族の勇者と呼ぶにふさわしい御方、ゆえに彼の御方はあの場所の守護を任されているのだ。

そのような御方にお会いできたのだ、この新入りの感動はひとしおのものだろうと私は思っていた、だが新入りはそこで

表情を曇らし、その後の言葉を中々口にしなかった。

「どうした、何かあったのか？」

私が尋ねると新入りは顔を俯けながら言った。

「いえ、こんな話を私のようなものがしても信じていただけるかどうか・・・」

「ふむ、取りあえず話してみるがいい、信じる信じないはともかく、話を聞かなければ始まらない。それにお前も誰かにそのことを

報告するために走り回っていたんだらう？」

「わ、分かりました、すべてお話致します。」

私があちこちの方々に挨拶をしながら城を歩いていると、城の一角にある
曲がり角に差し掛かったのですが、そこでふと顔を通路の先に向けると

ギマルツ様のお姿を見かけました。

私のようなものでも知っているあの噂に名高い御方に会えるなんて、と感動に打ち震え、ぜひ挨拶をと思い近づこうとしたのですが、なにやらどなたかと話をしていらしたのでそれが終わってからにし

よう

と思い、邪魔にならぬよう曲がり角に姿を隠して待っておりまして、すると会話の内容が漏れ聞こえてきたのでございますがその内容が、
「ほう、召喚された人間か、ということとはここにはW Kを覚醒させるために
来た、ということか」

「来たってゆうか飛ばされたって感じだな、気づいたらなんか知らん部屋に
居たんだよ、ってかやっぱ俺が来た理由知ってたんだな」

「くくく、今まで何人の人間が召喚されここに来たと思っておる。
しかしW Kやジョブも持たぬ人間が力に守られているとはいえ
このわしと口が利けるとはな、普通なら心臓が止まっておるぞ」

「あいにく俺の心臓にはラッコ並に毛が生えてるんでね、
ちなみにラッコの体毛の数は世界一位だ」

「・・・意味は分らんが、貴様が豪胆な人間だということはわかる、
してなにゆえ城内をうるついでおる、時間が経つまで隠れていれば
よからう」

「なに、丁度あんたみたいな奴を探してたんだよ」

「・・・ほじっ?」

そこで私はさすがに我慢できず顔だけを出して話し声のする通路を

見ました、
すると

パチン

という音がしたと思うとギマルツ様の体が眩く光りだしたのです！

「ぐうううううおおおおお！、なんだ、これは！！力が、
力が抜けていく！！！」

「シルブレっていうものらしくてね、魔族の力を
弱めるものらしいよ」

「シルブレ・・・だと、バカな！！シルブレがこれほどの力を
持っているはずがない！体も動かぬ！ぬううう・・・何をした、
人間！！！」

シルブレとは特殊な鉱石を加工し、それに聖職者が祈りを捧げて完
成する

指先サイズの球体でそれを使うと魔族の力がしばらく低下する、と
いうものです、がギマルツ様のような最上級格の魔族には効果が無

い筈、
なのに！ギマルツ様は片膝を着き、片手で胸を掻き篋り、もう片方の手で
頭を抱え、とても尋常な御様子ではありませんでした！

「こいつは普通のと違ってね、
本当にとびつきり強力な魔族にしか効果がないっていう変わり物らしい、
シルブレクエスタとか、店主はご大層な名前付けてたけど、用は欠陥品で奴だな、
普通の魔族相手にはただの石ころだしな。
値段も安かったし・・・だがまあ、物は使いようだろ？」

そう言うと、私が目にしたその人間は

本当に楽しくてたまらない子供のような

満面の笑みをしていました

第六話 魔神城（笑）（後書き）

六話からしばらくギャグが少なくなります、
ギャグばっか書いてたからなんか落ち着かない

第七話 魔神城（笑）ですか？いいえKファイアです（前書き）

読み返してみても余りにひどかったなので全体的に改訂してみました
これからもちよこちよこやってしまい御見苦しいかも知れませんが
御了承ください。

第七話 魔神城（笑）ですか？いいえKファイアです

目の前の光景を私は信じられませんでした。

あのギマルツ様が何の力も持たないただの人間に膝を屈しているのを、

ですが本当に信じられないのはこの後に起きたことなのです。

「んーいい感じだねえ、安物なのにいい仕事してるな。」

「貴様・・・ぬうつ・・・しかし、所詮はシルブレであろうが！ならば効果はすぐに切れる、

その僅かな時間で貴様に何ができる！？」

「そこでこいつの出番なのだよ」

その人間はそう言ってズボンのポケットから何かを取り出しました。

「こいつはソウシの笛で奴だね、自分よりかなり格下の魔族に一度だけ

命令できるって物らしいぞ。

シルブレとセットで安く売ってたんだよ」

「ふん！どんな考えがあるのかと思えば・・・それで私を操ろうというのか？

いくら力が下がっているとはいえ、何の力も持たぬ人間ごときがわしより格上になる事など有り得ぬ！」

「気づいてないの？」

「何!？」

「言っただろ?普通のと違うって、あんたに使ったシルブレは確かに5分も持たない、だけど普通のととは違う二つの効果があるんだよ」

そう言つて、人間はその笛を吹きました。

「ぬぐわああああおおおとおおああああ
ぐぎいいいいいいいいああああああ
がああああああああああああああああ!

「1つは対象の行動を封じること、もう1つは、効果中の対象はどんな道具の効力も無効化できなくなる、つまりこの二つを使えばあなたは無条件で1度だけ俺の言いなりになってしまうんだよ」

「ソ・・・んな・・・コと・・・ガ・・・」

「あ、ちなみに命令した後にシルブレの効果が切れても命令された事は実行することになるから、そこんとこよろしくね」

「カ・・・か・・・ガ・・・」

「・・・・・・・・」

そうしてギマルツ様の目に光が消えていきました、そしてそれを確認してから

「んじゃ命令「俺がこいつで合図をしたら城内で大きな騒ぎを起こし、

その混乱に乗じて魔神を殺せ」いいな？」

人間はそう言っつて”何か”をギマルツ様に投げ渡しました

「ああ・・・わカッタ・・・」

ギマルツ様は何の迷いもなく頷き、その”何か”を受け取っていました

「よし、んじゃそれまで普段どおりに行動してろ」

そして、シルブレの効果が続いた後、ギマルツ様は何事もなかったかのように

通路の奥へ行ってしまうれました。人間はギマルツ様の背中を見送り、軽く

手を振っておりました。すると、

「ああ、ちなみにさっきのあいつの悲鳴は誰にも聞こえてないよ、そついう道具も使つといたからね、だからあいつの異変に気づく奴はいない」

と

「あんた以外」

こちらに背を向けたまま人間は言いました。
私は背筋が凍りついたかと思うほどその場で
動けなくなっていました。

「自分が他人を見ているとき、自分もまた
見られていると思え、ってやつだ、ああ、
今のこと別に言いふらしてもいいよ、
あんたみたいな明らかな下っ端が言ったところで
誰も信じやしないだろうからね。」

そのまま人間はこちらを見ることもなく、
奥の通路の闇に消えていきました。

何を言っているんだろうこいつは、

話を聞いた私の最初の感想はそれだった。

こいつ気がふれているんだろうか、それともなにか変なものを喰ったのだろうか、そう思っていた。

あのギマルツ様が人間に操られて魔神様の命を狙う？
有り得るはずがない。

あの方の魔神様への忠誠心は生半可なものではない、
死ねと言われれば迷いなく死ぬだろう。

殺せと言われれば一国の人間を皆殺しにするだろう、
だが間違っても魔神様に刃を向けるようなことはしない。
それは、魔族の常識と言えるくらい当たり前のことだ。

と、そこで私は新入りに視線を向けた。

最近城に配属にされたというのが私は全くこいつを見たことがない、
確かに部下を自分で選ぶことはできないが、

それでも何日かは居るといふのに
全く知らないなど有り得るだろうか。

答えは否、となるとこいつは恐らく変装しているのか、目的は
今言ったことを私に広めさせ城内を混乱させ、その隙に
魔神様を害する、というところか。

そう頭の中の考えがまとまった瞬間、私は魔族、いや侵入者
に向け、爪を振り上げ飛び掛った。

「な、何を！」

侵入者は慌てながらも私の爪を紙一重で回避していた。

「黙れ侵入者！そのような戯言を信じる者などこの城、いや
魔族の中にいるものか！！正体を現せ！！」

「・・・」

私がそう叫ぶと侵入者は顔を下に向けた、
ふん、観念したか。

そう思っていると、侵入者は懐に手を入れ何かを取り出し
私がおかをする暇を与えぬ速度で

ドズッ

「ぐー！」

それをそのまま自分の二の腕に突き刺した

「な！」

取り出したのはナイフ、それをそのまま自分の二の腕に深々と
突き刺したのだ。

そしてその侵入者は顔をこちらに向けこう
言い放った。

「信じていただけなのは承知の上！それでも、このままでは
魔神様の身に危害が及んでしまいます！

信用のあるギマルツ様だからこそ、難なく
魔神様の御前にまで辿り着けてしまいます！

そうならば最悪の事態も考えられます！
お望みならばこの四肢切り落としていただいても
かまいません！お願いです！どうか信じてください！！」

腕に刺さっているナイフをもう片方の腕で握り締め、
そうついなながらこちらを見る魔族。
刺さっている箇所からは青い血が滴っていた。

青い血・・・それは魔族の証、いくら人間が姿形を変えたとしても
血の色までは変えることはできない、そしてこの魔族の必死に訴え
る目。

先程までの自分の考えが歪んでいく、
私は間違っているのか？この魔族は真実を訴えていたのか？

「なぜ・・・下級魔族に過ぎない貴様がそこまでするのだ」
私は気がつけば構えを解き、そんな問いを投げかけていた

「確かに私は下級魔族、ですがそれでも誇り高き魔族の一人！
その私の神である御方の危急を知っていながら何もしないなど
できるはずがありません！！そして神を御守りする為に
どうして自らの命を惜しみましょう！！」

その魔族はゆっくりと、しかしとても強い思いを込めながら

そう言った。

私は・・・なんということをしてしまったのだろう。

この新入り、いや・・・誇り高い戦士を疑ってしまうとは、
軽率な考えでこの戦士の命を奪ってしまうところだった、
自分自身の無能さに恥ずかしくなる。

私は素直に正面にいる魔族に頭を下げた。

「すまなかった、お前・・・いや、貴公の言うことはもっともだ、
私とて、貴公と同じ立場ならなんとしても仲間に伝えよう」

「では・・・」

「うむ、貴公の言うことは信じがたい事だが、私はそれを真実として
受け止め、行動しよう」

「あ、ありがとうございます！」

その戦士はそういいながら、がばっと頭を下げてきた。

礼を言うのはこちらのほうだ、貴公のおかげで
私も魔族として大切なものを思い出すことができた。

「さて、ではどうするか、ということになるが、

我等のような者が上級魔族の方にもこのようなことは信じていただけまい、また、下手に先にこちらが行動を起こせばその人間も動きを変更してくる恐れがあるぞ。」

私は下級魔族を指揮する立場にはあるがそれでも階級的には精々下の上くらいだ、とても上の方には信じてもらえない。

むう・・・と二人で悩んでいると、何か閃いたのかその魔族は顔をパツ

と上げ、口を開いた、

「分かりました、ならばこういう方法はいかがでしょう」

私は彼の提案に賛成した、現状で我々にできるのは確かにこれが限界だ、だがこれならば魔神様への危険性はグッと下がるはずだ

「うむ、分かった、確かにそれが私たちにできる最良の行動だろうな」

私はそう答えた、すると彼は以外にも、

「ありがとうございます……ですがその前に一つ
やっておきたい事があるのです」

と、彼は更にもう一つの提案をしてきた。

「私はこれからギマルツ様の元にお伺いしようと思います」

「何を言う！危険すぎる！」

「あの人間がいつ合図をだすかは分かりませんが、ギマルツ様が
受け取ったあの”何か”を奪うことができれば事態は未然に防ぐこ
とが

できます、何も起きなければそれに越したことはありませんから。」

「貴公は……」

「もとよりこの命は魔神様のものです、それに私が消えたとしても、
私の事を信じてくださったあなた様がいれば私は安心して逝く事が
できます。」

彼は死ぬ気だ、死ぬ気でギマルツ様の下に行く気なのだ。

「ただ新人入りですのでギマルツ様のいらっしゃる場所が
分かりません、恥ずかしながら教えていただけないでしょうか？」

そう恥ずかしげに聞いてくる彼を、私は心の底から美しいと思った。

私はギマルツ様の居場所を教えるから無言で彼に握手を求めた、
私は彼に同じ魔族として尊敬の念を抱いたのだ。

だが彼は、

「その手は戻ってきてから握らせていただきます。」

そう言つて、来た時と同じように小走りをしながら廊下の奥に消えていった。

私は彼の背を見ながら天に祈つた。

どうかあの誇り高き勇敢な戦士と再び再開できますように」と

だが無情にも、この願いが聞き届けられることはなく、
Aと彼が再会することは二度と無かつた。

第八話 魔神城（笑）は今日も平和です

ギマルツは魔族の中でも最強の部類に入る強さを持ち、魔神への忠誠心も人一倍持っている。

魔神もそれを分かっているからこそ、彼にこの任務を与えているのである。

ギマルツはこの仕事を誇りに思っていた。

自らの忠誠心を魔神が十分理解していると、

今日も与えられた任務をこなしながらギマルツは、魔神への感謝を思い続けていた。

「あれ？」

するとすぐその曲がり角から魔族が姿を現した、

姿形から中位クラスの魔族と思われる。

何故かこちらを見て疑問の声をあげていた。

「貴様、ここに何用だ、返答しただけではただでは済まんぞ！」

そう言うとギマルツはその魔族を多少加減しつつ威圧した、

大抵の魔族、いや生物はこうすれば腰を抜かしてしまうのだ。

本気でやればそれだけで命を奪ってしまうこともある、

中級魔族は案の定、尻餅をつき、怯えた様子で慌てて

「ま、まままままってください！は、話を聞いてください！！」
そう言いながら早口で話し始めた。

「さ、先程上位魔族の方に『ついさっき
ギマルツ様が玉座の間に向かっていているのを見かけた、
随分慌てた様子だったから恐らくここが無人に
なっているだろう、私が説明しておくから
お前はギマルツ様が戻ってくるまで
変わりに任務をこなしておくように。』と
言う指示を与えられたのでここに来たのでございます、
決して嘘偽りなどではありません！！」

「何を馬鹿なことを、私は今日ずっとここで任務を
こなしておるわ！」

「え、え？」

「大方そやつが見間違えたのであろうが、能力はともかく、
私に似た武具と体格の持ち主なら上級魔族なら珍しくあるまい」

「いえ、で、ですが私もしかとこの目で確認しました、
随分急いでいる様子でしたがあれは間違いなく
ギマルツ様でした。」

「何だと・・・？」

私と同じ姿形をした者がいてその者が玉座の間に
向かっている？

「それが虚偽なればどうなるか分かった上でのことであるうな!？」

私はその魔族に先程よりも強く威圧しながらそう質問した。

「このような悪ふざけがどうしてできましょう! 私とて無断でここに来ればどうなるかくらいはよく理解しております!」

その魔族は今度は怯えることもなく強い口調でそう答えた。

目や体に不審な動きは見当たらない、
どうやら嘘ということではないらしい、

「つまり何者かが私に成り代わって玉座の間に向かっているということか・・・?」

私がそう呟くと、中級魔族は途端に顔を青ざめた、

「そ、そんな! それでは魔神様のお命が危険です!」

「馬鹿者が、折角変装していながらそのような慌てる態度をとる、その程度の輩に魔神様が遅れをとる分けが無かるうが」

そう、その程度の小物に魔神様を害する事などできるはずは無い、私はそう思ったがその魔族は先程とは別人のように

「何を言うのです！確かに小物かもしれませんがギマルツ様に変装しているのですよ！恐れながらギマルツ様は御自身が想像している以上に魔神様に信頼されているのです！万が一の事も十分考えられます！」

と、声を荒げながらまくし立てた。

「これから私はすぐに玉座の間に向かい、なんとしてもその侵入者を排除します！」

・・・しかし悔しいですが私のような中級魔族がいくら叫んでも誰にも信じて頂けない。

ギマルツ様！どうか私と一緒に玉座の間に来て頂けないでしょうか！？」

「む…」

中級魔族は激しい口調でそう言った

確かに侵入者が私に変装していれば、

この魔族が何を言ったところで誰も信じることはないだろう。

そもそも中位クラスでは玉座の間に近づくことすらできない、その侵入者はそのまま疑われることなく魔神様の下に難なく辿り着いてしまう。

とすれば・・・

魔神様は私に全幅の信頼を寄せてくれている。

この魔族の言うとおり最悪の事態も十分

考えられるか

「よかるう事は一刻を争う、すぐに向かうぞ！」

「は、はい！」

私はその魔族の横をすり抜けそのまま玉座の間に

「ぐぶっ！」

べちゃっ

行こうとするやと後ろから咳き込む声と

何か液体が地面に零れた時のような音がした。

私が振り返るとそこには片膝をつき、片手で口を

押さえ、片手を地面につけ、小刻みに体を震わせている

先程の魔族の姿があった。

口を押さえている手からは青い血がだらだらと垂れている。

「どつした!？」

「や、やられました・・・あの時。妙な匂いがしていたので
気にはなっていたのですが・・・恐らく侵入者は毒を撒き散らし
ながら移動していたのでしょう・・・げふっ！」

中級魔族は再び青い血を口から吹き出す

「わ、私は恐らくもう助かりません・・・ギマルツ様、
お願いでございます・・・どうか・・・どうか魔神様を・・・」

御守りして下さい

今それができるのはあなた様だけです

最後の方は耳を近づけようやく聞こえるほどの細かい声
だったが確かにそう言って、その魔族は地に伏して
動かなくなつた。

私は身に着けていたマントをその魔族に向けて放り投げた、
マントはひらひらと舞いながらその魔族の全身を覆い被した

お前の最後の願いは確かに聞き届けた
だから安心して眠るがいい。

そう私は心の中で思いながらそのまま玉座の間に
駆け出した。

卑劣で卑怯な侵入者、絶対に許しはせん！
私の手で必ず八つ裂きにしてくれる！！

そう思いながら全力で駆けていると、すれ違う魔族達が
何事かとこちらを見る、

「侵入者が玉座の間に向かってている！皆急ぎ駆け付けよ！」

と私が言つとその声を聞いた魔族達は慌て、戸惑い、驚き
様々な表情を浮かべたが、事態の危険性を察知し
私の後に続いた。

玉座の間の扉は開いていた
普段いるはずの門番も居ない
私は最悪の事態を想定し、
勢いをつけたまま乱暴に玉座の間に入った

玉座の間に居たのは魔神様と

本来その部屋に近づくことすら許されない筈の

一人の下級魔族が居た

第九話 今日ね、家（魔神城（笑））に誰もいないんだ・・・

「ふむ」

それが私が玉座の間に入ってから初めて言った魔神様の御言葉だった。

「まさかとは思っておったが、こうして実際に起きると信じざるをえんな」

「は、はい、私もまだ信じることができません」

魔神様と下級魔族が会話をする。

「魔神様！いえ、『アークリンデ様！』ご無事ですか!？」

私は叫ぶ、いや、吼える。

「ふむ、そう言ってここまでやってきたか、中々良い手じゃのう」

アークリンデ様は何一つ変わらぬ態度で答える

「まさか、御主程の力を持った魔族が人間に操られるとはのお・・・おもしろい道具も世の中にはあるものじゃな」

「は？」

アークリンデ様が何を仰っているのか私には理解できなかった

「まあ当然の反応じゃの、自分が操られていると分かるはずもなし、当時の記憶も無くなっておるのか」

「な、何を言って・・・」

「本当に残念じゃのう・・・まさか御主程の人材を失うことになるとはの」

そういつて

アークリンデ様がこちらに片手を向けると
周囲一面が真っ白な光に包まれて

「まっ・・・！！！！」

「勇者殺し」のwkを持ち、最強魔族の一角に
数えられるギマルツの存在は、あっさりと
この世から消え去った

玉座の間には魔神、アークリンデと
ギマルツが来る前から居た下級魔族
二人のみとなっていた。 Aの

Aは目の前の光景を見て何も言えず暫し呆然としていた。
先刻までそこにいたギマルツも含めた魔族全員、
すべて消え去っていたのである

「しかし今回の勇者は中々面白い方法を使ってくるのう」
ギマルツは魔神の名前を言っていたが、それは極めて高い
クラスの魔族だけが許されることで下級魔族が言えば
その瞬間に消されることもある。
魔神アークリンデは感心したようにそう言った

「自分で倒せぬなら敵の部下にやらせる、か
手段を問わぬそのやり方は中々好感が持てるのう、
御主が報告に來なければ面白いことになっていた
じゃろうな」

くくく、と魔神様はそう言って微笑んでいた、
確かにもう少し私があるのが遅かったら、
こうまであっさりと終わっていなかったらう。

あの時、私と彼が考えた手とは極めて単純、

ギマルツ様が何か騒ぎを起こした、と判断したらそれより先に玉座の間に行き、事の次第を報告する、それだけだった。

幸いギマルツ様のいる場所は玉座の間から距離がある、何かあればこちらのほうが早く辿り着ける。

ただ、私のような下級魔族では普通なら門番に止められる、そこで少し強引な手を使った。

彼の持っていた眠り粉を嗅がせて眠らせ、部下に適当な理由をつけて門番を移動させて介抱するように命令し、そのまま玉座の間に入ったのだ。

彼は戻ってこなかった、その事はとても悲しい、だが事態是最悪の事態を免れたのだ。

彼も天で満足していることだろう
そう思っていると

「い、一大事でございます!!!!!!」

そう言つて一人の魔族が駆け込んできた

今頃ギマルツ様の報告か、だとすれば遅すぎる。

魔神様もそう思っていたようで、

「遅いわ、今頃来たところですからすべて終わった後じゃ、妾の命を狙っていた者はたつた今すべて消えたわ」

そう仰つたが以外にもその魔族は

「えーい、いえ違います!」

そう言って、信じられないことを言い出した

「ほ、宝物庫がもぬけの空になっております!?!?!」

「・・・何?」

妾は思わず尋ねる

宝物庫・・・ギマルツが守護している・・・いや、
していた場所。言うまでもなくそこには魔神城の
すべての金銀財宝や伝説、神話級の武器、希少効果を持つ
道具など、様々な物が収められていた。

それが、全て無くなった？

宝物庫の鍵はギマルツが持っている筈だ、

鍵は妾が直接作った特別製、先程の

光程度では消滅しない。

ギマルツが消滅しても鍵はそこに残るはず、

だがギマルツの立っていた所には

塵一つ残っていないかった

ここに来る前に先に持ち出していた？

それなら鍵を持っていない理由が分からない

操られたのはつい先程、そもそも持ち出す時間は無い、

しかもギマルツは合図が有るまでは普段どおりに

行動するように命令されていたという、

仮に人間が宝物庫に進入しようとしたところで

命令外の事ゆえ排除されるのは目に見えている。

命令する時に奪っていた？

それならギマルツが鍵が無くなった事に気づくはず

妾が思考しているとその魔族は続けて話し出した

「つい、今しがた通路でこのような物を拾い

宝物庫を見に行つた所、宝物庫の扉が開いており失礼かと思いましたが中を覗いて見た所、

な、何一つ無くなつており、

変わりにこちらにも壁にこんな物が・・・!!」

その魔族はそう言つて二枚のカードを持っていた、

妾が指を動かすとそのカードはふわふわと宙を舞い

そのまま手元に来た、

そして妾はそのカードを読み始める

一枚目・・・その魔族が拾つたカードにはこう書かれていた

宝物庫のお掃除、綺麗に終わりました

第十話 お城の名前はよく考えましよう

時間は少し遡り、ギマルツが宝物庫から玉座の間へ
駆けていった直後の宝物庫前

そこに一つの動く影、蠢く物は一つのマント、
その下にある物の上半身が突然起き上がり

「ふー」

そこには勇者の鼻に棒を突っ込んだ”彼”がいた、

「うーむ、まさかあそこまで単純とはな・・・
もう少し苦労するかと思っただけど・・・」

チャラ

彼の手に有るのは一本の鍵、それは先程まで
ギマルツが持っていた宝物庫の鍵に他ならない。

「あんな無造作に腰に付けてんだもんなあ、
盗って下さいっていつてるようなもんじゃねーか。」

彼がギマルツから鍵を盗ったのはギマルツが玉座の間に

行くことを決意し、彼の横をすり抜けたその一瞬である、

向かい合っていた自分のすぐ右側を通り抜けようと

向かってくるギマルツの右腰に剥き出しに付いていた

その鍵を、右手で掠め取ったのだ、魔神の危機ということに動揺していた一瞬の隙を狙ったのである。

「まあ、それだけ自分の力に自信があっただろうけど・・・でも過信はよくねえよなあ」

そう言いながら被せられたマント退かしながら起き上がる彼、

「ふむ、中々良さそうなマントじゃないか、くれたみたいだし
いただいでおくか。」

そう言ってマントを肩に掛けながら宝物庫の扉の前に近づいていく、そのマントは良い物どころか伝説級の代物なのだが当然本人には知る由もない

彼が魔神城に来る前に買った物は三つ、

『ビックリグッズ お徳用セット』

内容

・化け札2枚

（いくつかの候補の中から選んで変身できる

自分と余りに体格差のあるものには出来ない

変身できるのは10分間、但し変身中に誰かに触られると

時間が残っていても効果は切れる。

一度変身したものには12時間たたないとできないあくまで外見を変えるだけなので触らなくても

アンサーのような索敵系魔法を使われればすぐばれる)

・刺すと刃が引っ込み刃の根元から赤い液体が出るナイフ
(液体は青色の物に交換)

・口の中で砕くと大量の色の付いた液体の出る飴
(青色を使用、液体は全くの無害)

『眠り粉』

・市販で売られている対魔族用のものと同じだが本来の使い方はほんの少しの量を風に乗せるだけで効果が有る
ある程度の力を持つ魔族には効果は無い、
だが彼はAに粉全てををクロロフォルムの要領で門番に嗅がせる用仕向けた為、門番は熟睡してしまった

『メッセージカード10枚入り 専用ペン付き』

これらを使って今の状況を作り出したのだ

具体的にはあの部屋を出た後、手ごころな魔族を見つけ
化け札を使い宝物庫の場所を聞き出す。

だが単純に宝物庫の場所だけ聞けば当然疑われる。
そこで宝物庫の門番の出番である

宝物庫の様な重要な場所にはそれ相応の強力且つ、信頼の置ける
魔族が居るのは当然である。

そこでまず門番の名前をAから引き出し、
そして自分達の事をあえて教え、門番の反乱という有り得ない行為に
現実味を持たせ、且つ芝居をしてそれを誰にも言えない様にする。

その後、適当に理由を付けて門番に会いに行くと言い、
宝物庫の場所も引き出し、その場を離れ（この辺りで変身が解けて
いる）

他の魔族に気づかれぬように今度は宝物庫へ向かう。

そして宝物庫に着いた後、また化け札を使い別の魔族に変身し、
ギマルツに偽者の存在を示唆する。

Aとの会話からギマルツは魔神に信頼されている、と知っている事
を推測し、

それを逆手に取り、偽者の危険性を上昇させた。

結果ギマルツは宝物庫を離れ、玉座の間に向かう。

向かっている途中で魔族に侵入者の存在を話すだろうから当然騒ぎ
になり、

それはAの耳にもすぐ入り、魔神に報告するだろう。

結果ギマルツと大勢の魔族は消滅し、且つ、ただでさえ宝物庫に近
づく魔族は、

少ないのにも以上に少なくなる。そして自分は、

「さーてお掃除お掃除」

極めて安全に宝物庫に侵入できる

鍵を使い、重々しい扉を開ける、そこには

「うわー、想像以上に散らかってんなあ」

体育館程の広さの部屋、その部屋全てが武器、財宝、
道具によって埋まっており、さながらアスレチックのようになって
いた。

「んー、ここまでゴミだらけとは・・・いくらなんでも
予定外だな、時間も20分くらいしかないし・・・
どうすっかなあ」

そう言いながら無造作に落ちている本を手に取った、

・コノ本ノナハ蔵書カタログトイウ

- ・コノ本ニ八持チ主ガ触レタ物ヲページニシテ、トジルコトガデキル

- ・1ツノモノニツキ1ページ

- ・ページニハソノ物ノ名前ト効果、使イ方が記サレル

- ・ページノ上限枚数ハ無イ

- ・仕舞ツタ物ヲ取り出スニハソノ物ノ書カレタページヲ本カラ破レバヨイ

- ・本自体ハ持チ主ノ意思デ何時デモ出シ入レ出来ル

- ・本ヲシマツタ状態ダト頭ノ中デ、本ノ中ノ物ヲ検索デキ、ソノ後本ヲ出スト検索シタ物ノページガ開イタ状態デ現レル

- ・生キテイル物ヲ入レルコトハ出来ナイ

- ・ページニナツタ物ハ、ナツタトキノ状態ノママデ保存サレル

頭の中に突然そんな情報が流れ込んできたと思うと、その本はいきなり消えた。

すると使い方が体に勝手に染み込んでいるような感覚になった。

半信半疑で手をかざして本をイメージすると
先程の本が自分の手の中に現れた

「おおう、こいつは便利だな、ご都合主義万歳！」

分けの分からないことを言いながら彼は本の力で
宝物庫の”ゴミ”を掃除し始めた。

そして”掃除”が終わり、宝物庫が塵一つない状態になって

「んじゃ挨拶の手紙でも残しとくかな。

・・・そうだ！折角だし掃除したのはイケメン君ということに
しておいてやろう。」

俺みたいな一般人より勇者がやったって事にしておけば、
魔神も勇者を礼儀正しい人間と認めて後々良い関係が築けるかもし
れんしな。

うーん、俺って本当に奥ゆかしいなあ、命がけの自分の手柄を
世界の為に他人にあげるなんて。」

さらさらさらっと

メッセージカードに勇者からの礼儀正しい御挨拶を書いてから
宝物庫の壁にぺたりと貼り付ける。

ただ、ここだけでは気づかれるのに時間がかかる可能性もあるから
近くの通路にもう一枚書いて置いて置くところ。
さて、名残惜しいけどそろそろ時間かな、

そして彼らが帰った後、時間は戻り、
魔神は宝物庫に有ったほうのカードを

読み始めた

拝啓、魔神様。

私、つい先日召喚された勇者でございます、
今回はご挨拶にお伺いしたく参上しましたが、
御前に行く途中に目に付いたこの部屋と城全体の
余りの散らかりように心を痛め、挨拶代わりといたしまして
勝手ながら掃除をしようと思った次第で御座います。
ただ、私がこの城に居られるのは極僅かな時間である為、
掃除の分担をしようと思いい立ちました。

勝手ながら城全体に散らばっているゴミを魔神様の下に集まるように
しておきました。先程の感じた振動のご様子ではうまく
いったようで何よりで御座います。
私もなんとかこのように塵一つ残さず掃除が出来ました。
直接お会いできなかったのは心残りでは御座いますが、
それは次の機会の楽しみと致しておく事に致します。
ではくれぐれもお体に気を付けて。

今世紀最高の怪盗にして女性吸引力の変わらない
唯一人のイケメン勇者

アルセーヌ・ヒデト・Dソン・サギヌマより

PS 自らの城に自分の名前そのまんま付けるのは
どうかと思います(笑)もうちょいいい感じの

名前付けないとネーミングセンス疑われますよ？

直後

咆哮と共に放った魔神の閃光によって魔神城は半壊した

第十話 お城の名前はよく考えましよう(後書き)

伏線難しいなあ

第十一話 あいつ・・・無茶しやがって・・・

閃光が消え去って一人玉座の間に佇む一つの影、

いや、玉座の間と呼ばれていた場所、今は天井の一部が崩れ、辺りは瓦礫が散乱し、粉塵が舞い、廃墟のようになっていた。

その影は魔神と呼ばれる少女だった。

見た目は10代前半の幼さを残す少女、

髪は眩く輝く金色で腰までストレートに伸びており、

黒いゴシックドレスを着ている。

西洋風人形のようなかわいらしい外見だが、

この城の主であり、半壊させたのは紛れも無く彼女である

「魔神アークリンデ」

不老の力で無限に近い寿命を持ち、数千年の刻を生きている

その魔力は限界が無いと言われている。

彼女は初めて一つの激情に支配されていた。

「ふ・・・ふふふ、つまりはあれか？妾は勇者の策略にまんまと嵌り自らの手で多数の忠臣をこの手で殺め、且つ宝物庫の中身を丸ごと盗まれた、ということか・・・？」

ふふふ、と

彼女は俯きながら自嘲気味に笑っていた

そして突然顔を天に向け、

「ひ、ヒデト様!？」

あのままの状態で城に戻っていた

「くそっ!!! だからやめるとあれほど言ったのにつ!!!」

気絶させた張本人が両膝を地面に付け、両手を石床に叩きつける。
見る人が見れば本当に悔しそうに見える

「い、一体何があつたのですか!？」

エクレール姫が尋ねる、

気になるのは当然だ、外見も良く、話をしてみても好印象

しか抱かず、周囲への受けもいい、そんな期待どりの

勇者様がなぜか鼻に棒を2本突っ込まれ、気絶した状態で帰還した
のだ、

気にならないほうがおかしい。

「・・・俺達があちらに着いて、しばらくしてから運悪く奴らに見つかってしまったんだ。それでもこちらには手を出せないだろうから

このまま時間が経つのをまとうと考えていたんだ・・・」

鼻に棒を2本突っ込んだ張本人は語る、まるで見てきたかのように

「だが奴らは卑劣にも捕らえていたという人間の子供を連れてきて人質にしましたんだ!!」

ぞわっ

周囲の人々がざわめく

「俺は、言ったんだ！『絶対にこれは罠だ！何もしちゃいけない！』
って！だがこいつは、『こんな小さな子を見捨てて勇者なんて名乗
れない！』」

と言って自分から奴らに触れてしまったんだ！！！！

案の定子供は魔族が変身していて、やつらは時間が来るまでこいつを
いたぶり続けていたんだ・・・くそっ！！俺があの時もつと強く引
きとめておけば

こんなことにはならなかったのにつ！！！！！！」

額に油性ペンで巨乳と書こうとしたが油性ペンが無く、
本気で悔しがった張本人は語る

「おのれ魔族！！！」

「なんと卑劣な！！！」

「絶対に許せん！！！！！」

周りの人々が魔族の非道に対して怒りの声をあげる、

そんななか、その部屋で最も非道な”彼”は立ち上がり、部屋の出
口に

向かって歩き出す

「ど、どちらへ？」

おそらく初めてであろう、エクレール姫が彼の背に向かって話しか
ける

「街にでて空気を吸ってくる・・・これ以上ここに居ると俺は自分の不甲斐なさと、奴らへの怒りでどうにかになってしまいそうだ・・・!!」

彼は振り向く事無く答える、その両の拳と肩を震わせ、いかにも怒りが爆発寸前であることを見せ付けるかのように

だが何も知らない人々の中に彼を引きとめようとする者は居なかった

そして彼は召喚の間を出て街へやって来た

あちらに行く時はまだ日は中天にあったのに

今は日が暮れ、既に真っ暗になっていた

時刻になると23時過ぎというところだろう

あの移動魔道具が関係してるのだろうか

「さて、んじゃ用事も済んだし、この国ともオサラバするか」

ごく普通にそう言った

いやだってさあ、城の奴ら明らかに俺のこと消そうとしてるんだよ？

10日の間に”たまたま”警備の厳しい大臣の部屋に”たまたま”入る機会があったから折角だからと色々漁ってたら裏帳簿と一緒に俺の処遇についてみたいなこと書いてある書類があったんだよ。内容は簡単にまとめると”あんなのいらねえからさっさと事故死に見せかけて殺っちまえ”ってことでした。

なのでぼくは城を出る前に裏帳簿をひげもじや王の部屋に
まとめて置いておいてあげました。

ついでに大臣の部屋にあった金目の物も全部 カタログ蔵書に
しまっておきました。

どうやら俺が貰うべき金をピンはねしてたらしかつたので利子
付けて返してもらったんだ、決して泥棒じゃないよ！

この世界の細かいことは取りあえず別の街で調べるとして、
今はさっさとここからとんずらかますことを最優先しよう。
早くしないとうざりたいことになりそうだからなあ

そう言いながら俺は宝物庫のおっさんがくれたマントを取り出し
それで身を隠しつつ街を出た、相当大きかったのでローブみたいに
使うことが出来た。

取りあえず北に向かおう、ここからそう遠くない距離に街があるら
しい

こことそちらを歩き来してる商人に教えてもらった。
人もここより多いらしいし、そこで今後のことを考えていこう。

ちなみにイケメン君は記憶を無くすように調整して蹴つといたので
めんどいことにはならないと思う
昔殺った杵柄ってやつですね。

こうして、魔族と人間の戦闘が今まで以上に激化する
原因を作ったとうの本人は、
その辺りを散歩するかのような足取りで街を出た

第十二話 ヒロインに手を出す奴はジェノサイドが常識

北に向かいながら俺は蔵書カタログを開いていた
収められたページを確認しながら歩いているのだ
魔神城から今までまともに見る時間が無かったからな
ここらでじっくり読んでおこうと思ったわけだよ
自分の手札もわかんねえようじゃ人生という大勝負
には勝てないのだ。

ちなみに今は早朝だ、昨日は取りあえず街から出てすぐの
森に入って一夜を過ごした。
さすがに見知らぬ場所でも真っ暗の中進んでいこう
という気にはなれなかった。

街の宿に泊るのは避けた、すぐに城のファッキン共に
ばれてしまうと思ったからだ。
森なら隠れる場所も食料も困らない、食べれる果実や木の実や、
あの森に凶暴な獣もないということは本で調べていたので
これ幸いと判断したのだ。

ぺらぺらとページをめくりながら街道を歩く
辺りは一面の草原、日が上がりかけており
今日も晴れそうだが早朝ということもあり
少し肌寒い、風はそよそよと草木を軽く揺らす程度だ。
まあこの程度の温度なら凍死したり熱中症になることはないだろう
そう考えて歩いていると興味深いページを見つけた。

これを吹くと龍が1匹呼び寄せられてくる
どんな龍がくるかは吹いた本人によって異なる
現れた龍に自らの力を認めさせれば力になってくれる

おお、来ましたよドラゴン、これは吹かずにはいられない

なぜなら俺は動物が大好きで、特にでかいのが好きなのだ
動物は人間のように騙したり嘘をついたり手榴弾投げてきたり
宝物庫から物を盗んだり鼻に棒突っ込んだりしない、
汚い世間で傷ついた俺の心を唯一癒してくれるのだ
まあドラゴンが動物と呼べるのか、とかいうのはおいておいて
まあとにかく吹いてみよう

俺がページを破るとそれは形を変えて笛になっていった
宝物庫にあった奴だがあそこにあった物は特に見ないまま
ページにしたから形がよく分からん
でっかい角笛みたいなのを想像してたんだがそんなことなかった
ぱっと見犬笛だった
まあ形なんてどうでもよかったので口に当てて吹いてみた

「

」

ふむ、何も聞こえんな、音も犬笛みたいなんだろうか
それとも何か失敗して鳴らなかったんだろうか
吹き方に決まったやり方があるとか場所が指定
されているとか、
でもページにはそんなの載ってなかったけどなあ
うーむ、と考えていると

先程まで雲一つ無かったのに突然俺の立っている周囲
一面に濃い影がおちた

何だろう、俺の人生お先どころか全て真っ暗ってことを
天が知らせてるんだろうか
少しネガティブになりながら上を見るとその影の正体が
こちらに降りてきていた

猫科の肉食獣の様な体に丸太の様に太い四本の足、それから長い尻尾
だが体毛は無く、全身が美しい銀色の鱗に覆われており日の光が反
射し神々しく輝く、

顔は口は肉食獣っぽいが他はまさにドラゴンという感じで
その目はルビーのように燃え上がるような緋色だった。

全長は30、40m・・・いやもつとあるな
絵とかゲームだと大抵翼二枚だけどこいつは四枚生えてるな

とか色々考えてるうちにドラゴンは
ズズウン・・・と地響きを起こし地面に着地した
俺がこいつを見たときの・・・見たときの最初の感想は

かあああわいいいいいいいいいいいい！！！！
なにこれ何コレKOREナになにきゃああああああ！！

この世界に来て初めて発した言葉をものすごいでかく叫んでしまっ
た
でかい体につぶらな瞳、これでもふもふならいうことないんだが
これも十分イイ！！！！！！

ゆっくりと首を曲げながら興味深そうにこちらに顔を近づけてくる
俺の目の前にその顔は来た

そのときの体勢は散歩している時に犬が落ちている物に足を曲げて
顔を近づけているのに似ている

俺はナデナデしたい気持ちに逆らわず思いっきりナデナデした

これで死ぬなら本望だ！

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで

そして猫のようにあごの下をかく

ごろごろごろごろごろごろごろごろごろごろ

ドラゴンは目を細め気持ち良さそうにされるがままになっていた
それを見て俺は決心した

こいつをこの話のメインヒロインにする、異論は認めない

そうなのだ、この世界にはヒロインが居ないのだ

だがこいつなら十分その重責を果たせるだろう

そう考えているとドラゴンは大きな顔を俺にすりすりと

こすり付けてきた

その時俺の何かがぶつんと切れた

もう迷わない、俺はお前と一生生きていく、
俺がお前を養っていく、邪魔する奴は全員虐殺だ
俺がお前を幸せにしてやる！黙って俺について来い！！

「よし、お前の名前は今日から”くろごま”だ」

「ぐるるるる」

俺はなでなでしながらそう言った。くろごまは相変わらず
気持ち良さそうに喉を鳴らしている。

うむ、愛い奴だ、

だが、問題が一つあるな

コレだけでかいと人の住むところに行きにくい、

行くとびに騒ぎになりそうだな

まあこいつに手を出す奴は細胞一つ残らず消し去るけどな

「なあくろごま、お前大きさ自由に換えられないか？」

なでなでしながら聞いてみる。

動物との会話はとても重要なコミュニケーションなのだ
するとくろごまは

「ぎゅーっ」

と言うとポンツと音を立てていきなり小犬並に小さくなった
ばたばた四枚の翼を羽ばたかせながら俺の顔の真ん前にいた

おおっ、でかい時には劣るがコレもまたよしだな

そう考えていたらくろごまはふわふわ飛びながら俺の頭の上に
着地した。

「これはいいな、これなら特に目立たないだろう
さすがくろごま、俺の気持ちに素直に答えてくれるとは

「よし、んじゃ行くかくろごま」

「ぎゅっ」

そうやって俺は笛をしまい再び歩き出した

うん、幸先いいな、やっぱりこの世界は面白い！

楽しくなりそうだなあ

そして彼らの去った後には

くろごまが着地したときに出来たクレーターのような

へこんだ地面が残されていた

それは後にちよっとした騒ぎになるが、

本人達にはものすごくくどうでもよかった

第十三話 初めてのフラグ、でもフラグはへし折るもの（前書き）

明けましておめでとうございます

今年もよろしくお願いします

早速作ったのを投稿しました

宜しければ御覧下さい

第十三話 初めてのフラグ、でもフラグはへし折るもの

くろごまを頭に乗せながら俺はまた蔵書カタログを読みながら歩いている
くろごまは今丸くなって寝ている

さっきまでは俺が森で集めといた果物を食べていたが
腹が膨れたのか、そのまま寝てしまった
どうやら小さくなると胃袋も小さくなるようだ

一眼レフカメラで撮りまくりたいがこいつの眠りを
妨げるわけにはいかん

仕方ないのでくろごまの寝息をBGMに
コレを読んでいると言っわけだ

そう思っていると街道の横にウサギがいた
こっちに尻を向けもしゃもしゃ草を食っている
ふむ、ウサギって大型犬くらいあつたっけ
そう思っているとウサギがこっちを向いた
と思ったら突っ込んできた

ふむ、すまないなウサギよ、俺にはすでにくろごまがいるのだ
お前がどれだけ俺を思ってくれてもその気持ちには答えられない
何よりお前から殺気を感じる

俺は自分に殺気を向けてくるなら動物でも容赦はしない
突っ込んでくるウサギは距離3mくらいのところで
思いつきり俺の首目掛けて跳躍してきた。

そして首に噛み付いたと思っ瞬間
なんか地面に叩きつけられていた

俺の顔の前には尻尾がぶらぶらしている
頭の上からぶら下がっている銀色の尻尾、
それは紛れも無くくろごまの尻尾だった
頭の上からは相変わらず寝息が聞こえる
寝ながらも敵意には勝手に反応するんだろうか？
体型はそのまま尻尾だけ伸ばしてやったみたいだ
ちなみにくろごまがどういう風にしてるか分らんが
俺が頭を傾けてもずり落ちたりしない
磁石みたいな特殊な力で俺の頭に乗ってるっぽい

ウサギは完全に気絶していた

ふむ、こいつは俗に言う魔物かな？
焼いて食べばうまそうだな
しゃがんで観察しながらそう考えていた

そついであ魔物と魔族の違いってなんだろう
知能とかかな？

喰ったときの味で分けられてるのかな？
ふむ、今度魔族の味見でもしてみようかな
そう考えていると動物に似てるがなんか違うのが
他にも何回か結構出てきた

さっきのウサギも良く見てみたらウサギじゃなかったし
こいつらが俗に言う魔物、もしくはモンスターなんだろう

そいつらの相手を（くろごまの尻尾が）していると地平線の先に
建造物みたいなのがようやく見えてきた

「おおつ、なかなか大きそうなところだな」

まだ小さく見える程度だが規模が大きいというのはなんとなくわかる
このまま行けば昼過ぎくらいにはつくかなあと思っていたら

「ぎゅっ」

とくろごまが鳴いた。

いつの間にか目を覚ましていたのか
寝ぼけ眼を見損ねてしまった、悲しい

頭から伝わる重心の移動からなにやら一点を見つめているらしい
なんだ？と思つてそつちを見てみると

街道から東に離れた距離のあるところに人が集まっているのが見えた
人数は20人くらい、キンツキンツと剣撃の音が聞こえる、戦闘中
らしいな

殆どがごろつきや盗賊っぽいぼろい服に武器を持って一人の人間に
攻撃しているように見える

相手してるのは女かな、一人であんだけの人数相手にできてること
見ると

それなりの腕してるな。

んー、でもやつぱりやばそうだな、動きが鈍くなつてきてる。

怪我してるのか妙に行動がぎこちないしな

まあこの世は理不尽で満ちてるんだしこついつこつともあるだろう

正直者は損をする、狡賢い奴が得をする

思想は無くとも力があれば勝つことが出来る

弱者が強者に救われるなんて夢物語でしかない

金がない奴は治療もできんし飯も喰えん

美少女はイケメンの元に集まるようになってる

美少女は最終的にイケメンに惚れるようになってる

イケメンは最終的にハーレムを作るようになってる

俺もその理不尽のせいでこの世界にいるわけだしな

「くろごま」

「ぎゅっ?」

「ああ、頼む」

そう言うときろごまは俺の前に来てポンッと言って5mくらいの大
きさになった

俺はくろごまの背に乗って言った

「とりあえずあそこに低空飛行でおもいきり突っ込め、その後お
前は

高度を上げて上空から回りに伏兵がないか見張っててくれ

あいつらは俺が消す」

「ぎゅっ!」

くろごまはそう言って4枚の翼を羽ばたかせ、人の群れに向かって
超高速の

低空飛行で飛び出した

お前のせいで

なんであんなことを

やっぱりこいつが

消えてほしいよ

ああそっだ、世の中は理不尽で出来ている、それを否定する気はねえよ

人の作った世界に理不尽が無いなんてありえないからな

だからってそれを甘んじて受け入れるつもりも毛頭ねえ

世の中が理不尽で出来ているなら、

”ジン”ならできるわ

それ以上の”非常識”でぶっ壊してやる

くろごまは音を置き去りにして滑空する。

低空飛行のせいで地面に生えてる草は根こそぎ横たわる

そして通り過ぎた後に出来る一本の道

乗ってる俺は当然とんでもない空気抵抗やGを感じるはずなんだが
一切それが無かった

くろごまが守ってくれてるんだろう、かわいいし出来る奴だ

結構な距離があつたんだがくろごまに乗ってから数秒くらいで
もう10mくらいのところまで来ていた

そこで俺は勢いをつけくろごまから飛び降りて

「ぎゃっ!」

着地点にいた盗賊風の男に跳び蹴りを放った

返事が無い、ただのモブキャラのようだ

着地点は囲みの一角、くろごまはそのまま一気に急上昇した
みんななにやらぼかんとしながらこつちに視線を集めている
襲われてた女はかなり顔色が悪かった、あちこち傷がある
もう少し遅ければスリーアウトだったな
勝負は最終回ツアーアウトからなのだ

倒れているモブAの顔を片足で踏んづけたまま俺は言った

「廃品回収業者です、要らなくなったテレビ、冷蔵庫はございませんかー？」

そう言った後、くろごまが置き去りにした音と風が
俺の真後ろから一気に追いついてきて

俺と囲みの中心にいる女との間に
一本の道が出来た

ようやく我を取り戻したのか

「な、なんだテメエ！ぶつ殺されてえのか！！！」

「いきなりきて分けわかんねえこと抜かしやがって！！！」

「死にたくなけりやすつこんでるや！！！」

と盗賊風の男達が喚き出した

いちいち盗賊風の男っていうのもめんどいな

上から順にモブBCDでいいか

みんなかわいそうな服装してんな、服というより布切れみたいなのもいる

武器も錆びてボロボロの奴ばかりだな

と考えながら観察していると

「黙ってんじゃねえよ！テメエなにもんだ！？」

モブの一人が尋ねてきた

待ってたよ、その言葉！

「なんだ誰だと聞かれたら！答えてやるのが世の情け！
聞いて驚け見て笑え！あ、俺の名は！！！」

なんか色々混じったような気がするけどまあ気のせいだろう
そう思いながら近くに居たモブDに延髄蹴りをかました

「ぐえっ！」

モブDの系の切れた人形のように崩れ落ちていく様を見ながら

「お前ら粗大ゴミに言う程安くねえんだよ」

俺はそう言った

「テ、テメエ！名乗るんじゃないのか！？卑怯な真似しやがって！……！」

何を言ってるんだろこのモブEは

「お前ら阿呆か？確かに尋ねられたら答えてやるのが世の情けだけどな

お前ら粗大ゴミにかける情けなんざこの世にや存在しねえー

「よ

そう言っつて、

俺は”この世界で”初めての殺し合いを開始した

第十三話 初めてのフラグ、でもフラグはへし折るもの（後書き）

なんかようやくまともなのが書けた気がします

第十四話 物持ちが良いと整理できないは紙一重

ごめんなさい

前回ラストで殺し合いが始まったとか言っただけ起こりませんでした
始まったのは

一方的な蹂躪でした

「この野郎！ やっちまえ！！！！」

モブの頭っぽい奴がそう言うと一緒にモブ共が襲い掛かってきた

「へえ、いいのかなあ、そんなこと言っちゃって」

俺は余裕でそう答える

「君らさ、俺がコレだけの人数相手に一人で来たと思ってるの？」

途端にモブ共の動きが止まった

俺は懐を片手で探り出す

「君らがこの辺で暴れてるってのは結構噂になってるんだよ？」

既に君らに対する討伐依頼も俺以外にたくさん出てて、そいつらも
すぐそこまで来てる。これがその証拠だよ、目玉見開いて良く見て
ね

盗賊達の視線が彼の懐に集まる

そして彼が懐から取り出したソレは

紛れも無い

スタングレネード
閃光手榴弾だった

瞬間

凄まじい閃光があたり一面を覆う

「ぎゃあああああああ！！！！」

「め、目がああああああ！！！！」

「みえねえ！なにもみえねえ！！！！」

「何が起きたんだよおおお!？」

はっ、こいつら馬鹿なの？阿呆なの？死ぬの？

スタンゲレネード

閃光手榴弾をこんな至近距離から

目玉見開いて見るとか無いわー、マジ有り得んわー

どんだけ素人なんだよ、何勉強してきたんだよ

そう思いながら近くのモブが持っていたナイフを奪い取って

「ひゅっ」

「かつ」

「ひ」

視界を奪われ悶えているモブ共の合間を縫いながら

首を掻っ切っていった

閃光手榴弾はこっちに来たときにたまたま持ってた奴だった
物持ちが良いと良いことあるなあ

「あ」

「ぐっ」

「ひへっ」

情けをかける必要は無い、禍根は残さん

一度殺すと決めれば迷わず殺す

迷えばそれだけ自分が危険に晒される

ただ返り血は浴びたくないなのでその辺は気をつけて切る

血まみれで街に入れば即お縄になりそうだもんね

3分後、モブ共は誰一人動かなくなっていた 合掌

血がそこら中に散っている

赤いペンキを無造作に大量にぶちまけた感じで

その上にモブさん達が倒れている

切ってる途中で切れ味が落ちたのでその度にナイフを奪い取って
やっていた

「なまくらばつかだったな」

そう言いながら最後に持っていたナイフを無造作に放り投げた

さて、女の方は無事かな

そう思い女の居る場所に視線を向けた

俺が無双してる間、女は剣を持ち、木を背にして背後を取られない

ように

していたが既に立つ気力も無かったのか腰を落していた

まあ閃光手榴弾受けて何も見えて無かっただろうしな

そして今見ると女は横たわってぐったりしていた

あ、やばい、アレ終わってね？

スリーアウトは防いだけど次のバッターが9番で代打がもう居なくて

相手の守護神出てきたくらいに終わってる気がする

少し小走りで女に近づいて声を掛けようとする

「ち、近づかないで……ください……」

モデルのように整った顔立ちをしているが、今その顔はひどく歪んでいる

呼吸は荒く、ひどく憔悴しており、虫の息だ

髪は青みがかかった黒色で、長く後ろにストレートに伸びており後頭部にリボンが結んである

なぜ生きているのか不思議なくらい顔色は悪いが、着ている服装は極めて質の良い物というのが良く分かる

だがこれは……

正直襲われても仕方ないんじゃないだろうか

そう思えるくらい際どい服装だった

上は胸の上部までが完全に露出しており、

下はかなりのミニスカートで太もも全体が何とか隠れている程度

つまり胸中部から太ももギリ下部までしか無い

そんな服装だった、見た目的には一番近いのはチャイナ服にミニスカートか？

白を基調として、細かな意匠もしてあってかなり良い物だと分かるのだがなにより……

でけえ……

なんだこれ、こんなでかい人いるの？これってこんなにでかくなるもんなの？

こんなスタイルの美女って漫画にしかないんじゃないの？

ああそうか、こういうのがイケメン君のハーレムの一員になるのか、

マジ今度会ったら八つ裂きにしよう

ていうか何であの時息の根止めておかなかつたんだろう
くそうくそう、後悔しない人生を送るのが俺の目標なのに早くも挫
折した

試合が終わった後に殺り残したことに気づいてしまった

まあそれは置いていて、

やはりというかなんというか
しっかりと拒絶されましたね

まあ、仕方ないんだけどね

いきなり現れて敵とはいえ人間を躊躇無く殺しまくって辺り一面
血の海にした奴に心許すほうがおかしいだろう

「信用できんのは分かるけど、あんたこのままだとすぐ死ぬぞ？
簡単な手当てくらいしてやるから大人しくしとけ」

女の近くで片膝をついて俺は言った

大きな外傷は見当たらないがこの顔色は明らかに異常だ

毒か、大きな病気に罹っている可能性もある

そうだったらさっさと医者に見せんと手遅れになる

イケメンのハーレム要員になるとはいえ美女を見殺しにするのは

世界の損失だ、どこかの偉い人が言ってた様な言っない様なそん
な言葉を

思いつつ手当てのために女に手を伸ばすと

「ち、ちがうんです・・・」

弱々しくそう言った

「助けて頂いたこと・・・には、と、とても感謝しています・・・」

ですが、わ、私は
・・・重度の呪いにか・・・かかっている、触れた人・・・にも、
呪いがう・・・うつってしまふんです
だ、だから・・・」

俺は伸ばしていた手を止めた

呪い

人あるいは霊が、物理的手段によらず精神的・霊的な手段で、他の
人、

社会や世界全般に対して、悪意をもって災厄・不幸をもたらす行為

つまりオカルトか

俺はそういうのは興味が無かったがこつちでは技能として認知
されているのかもしれない

呪術師みたいなジョブがあれば説明がつく、

まあ剣と魔法の世界でオカルトが信用できんとか

そんなん頭固いとかってレベルじゃないしな

「ならあんたなんであいつらとやりあつてたんだ？

もともとここで死ぬつもりだったなら戦う必要も無いだろ？」

誰にも呪いをうつしたくないから人気の無いところで命を絶とうと
した

それなら盗賊と戦闘する理由が無い、その前に死ねばいいのだから

「ま、まだ・・・死ぬ前に・・・やり残した事が・・・あるんです」

そう言つて女は指差す

「私の妹が・・・ど、奴隷商人に攫われ・・・たんです・・・方々にて、手を尽くして
あの口・・・グスの商人だということ突き止めてこ、ここまで来たんですが・・・」

ログスというのはあの街の名前か、んでそこにいるはずの妹を助けるために

呪われてる体に鞭打ってここまで来たが、運悪く盗賊に見つかりつてどこか

この体じゃ禄に人と接する事も出来なかつただろうに相当苦労してここまで来たんだろう

「私は、もう・・・助かりません・・・でも、い、妹だけは・・・アーシエだけは、
な、なんとしてでも・・・助けてあげたいんです・・・」

そう言つて女は体を起こそうとする、だがもはや立つことも出来ないのか
足も手も震えているだけで動かない

「アーシエ・・・待っててね・・・お、ねえちゃんかも、もうすぐ・・・行くから・・・」

そう言つて芋虫のように這いずりながら街に向かおうとする女
恐らくもう目も禄に見えていないだろう

閃光手榴弾の効果はとつくに切れているはずだ
なのに見当違いの方向に行こうとしている
さっき指差した方向も街とは全く違う方角だった

人間死ぬときや死ぬ

どれだけ心残りがあるうとも

死は誰にでも平等に訪れる

死から逃げることは出来ない

死を遠ざけることも出来ない

死は誰にでも突然やってくる

そう

” 理不尽に ”

「はっ、上等だ」

俺は頭の中で目的の物を検索してから蔵書を取り出した
本は既に開いている
俺は目的のページを破って取り出した

そのとき空ではこちらが終わったのを察したのかくろごまが
こちらに降りてきていた

空は青かった、雲ひとつ無い程に

第十五話 人間観察してる人も観察されている

という訳でようやく来たよログスの街

くろごまを頭に乗せて入り口の門をくぐる

遠目で見たとおり結構規模が大きい

時間は昼ちよつとすぎつてどこか

人も多く、そこかしこに店が並んでおり活気がある

ファンタジーお約束の剣を腰に差した戦士や魔法使いの様な

外見のジジイ、果ては人間以外の人種もいた

エルフっていうのかな、耳が尖ってる

あつちのは猫耳生やしてる獣人でやつかな

他にも見たこと無いのが結構いたが俺はまず宿屋を探していた

適当にそこらの人に聞いて金は多少かかるが安全、且つ上質な

所を見つけた

門から続く道が大通りになっていて、そこに沿って立てられている所

外見は木造3階建てで極めて普通だが良く手入れされているのがわ

かる

安いところだとカプセルホテルみたいな奴もあるからな

さすがにそういうところはごめんこうむる

「いらつしやい」

中に入るとカウンターの中心に恰幅のいいおばさんがいた

働きやすそうな服装で腕まくりをしている

「一人かい？」

「いや二人だ、連れがいる、期間は取りあえず5日」

「食事は？」

「三食部屋に持ってきてくれ、一人分は消化のいい暖かいスープのようなのを」

「ベッドは？」

「ツインで」

「はいよ、前金で清算することになるけどいいかい？」

「ああ」

「じゃあ5日の食事代込みで500G貰うよ」

「分かった」

ツインで一泊100Gか、ロープレとか考えると結構割高だな

まあアレはレベルと仲間増えることに値段上がるしな

俺はズボンのポケットから適当に金貨（予めページを破っておいた）を取り出しカウンターに置いた
するとおばさんは変な顔をした

何だろう、俺の性癖でもばれたんだろうか？

硬貨置いた動作だけで分かるなんてどんだけ人間観察
しまくってんだろう

「あなた、この宿丸ごと使って泊まる気かい？」

「は？」

意味が分からなかった

「これ全部G6貨じゃないかい、おばさんをからかうのはよしとくれよ」

じいろく？なんだそりゃ？

「あなたもしかして貨幣の種類も知らないのかい？」

「ああ、何せ今まで禄に外に出してもらえない身の上だったんでね、説明してもらえると助かる」

まあ、嘘はついてない。こっち着てから最初の街の外に出たこと無かったしな
でも買物はやったし特に問題無いと思っただが

「貨幣には6種類あってそれぞれの数字がその単位を表してるのさ、貨幣に数字が彫られてるだろ？」

それで区別できるのさ。

G1貨なら1G、G2貨なら10Gで具合にね
あんたが今出したのは全部G6貨、つまりウン十万も無造作に出したってことだよ、おばさんびっくりしたよ」

「見た目感じ彫られてる数字以外違いは無いけど簡単に偽造されたりしないのか？」

「それは無理だね、貨幣には特殊な魔法が施されてね、数字を偽造しても見ればどの貨幣なのか分かるようになってるのさ。ちなみにその魔法を使える人間も厳重に管理されてる。もちろん貨幣の原材料の鉱石もね。私欲で使えば即お縄ってことさ。」

なるほどな、俺は貨幣なんて禄に見てなかったから分からなかったのか

買い物したときも適当におつり貰ってたしな。貨幣を見ると確かに頭の中にG6と表示される

「わかった、ありがとう。」

そういつて余分な貨幣をしまった

持つてる中で一番低いのがG4貨だったので1枚改めて出した。ピンはね大臣の部屋にあった奴だろう、元気にしてるかな？そろそろ縛り首になってるかな

「あと、このことは」

「分かってるよ、心配しなくても誰にも言わないさ、安心おし。」

大事なお客様だからね、と言っておばさんはおつりのG3貨5枚を出した

「じゃ、部屋に案内するよ。」

そう言ってカウンターから出て部屋に向かうおばさん。俺は荷物を担いでそれに続く

「にしてもあんたかわってるねえ」

部屋に向かう途中におばさんが言う

「あたしも仕事柄龍騎士なら何人か見たけど、頭の上に龍乗っけてる人なんて始めてみたよ」

くろごまのことをいつてるらしい

龍騎士？あれか、空高く飛び上がって降りてきたら

味方全滅しててやるせない気分になるあれか？

「あたしは知らないけど龍てのは子供の時はそうやって育てるのかい？」

くろごまはあの後また丸まって寝ている

そういあ街うるうるしてた時もなんかちらほら視線感じたなあれはくろごまを見てたんだらうか

「さあ、俺はこいつしか知らないからな。

他の奴らがどうしてるかは分からんな」

ていつかこいつ子供じゃないと思うぞ

全長50m以上あるしな

なんか俺を龍騎士と勘違いしてるらしいがめんどくさいのでそのままにしておく

階段をのぼり2階に来た

通路を進んで一つの扉の前でおばさんが止まる

「はい、ここだよ、鍵はこれ」

そう言って鍵を手渡される

「貴重品は自分で管理しておくれよ、失くしたり盗られたりしても責任は持てないからね」

「ああ」

「食事は出来たら持って来るよ、ほんとに昼食の時間は終わってるけど」

今回はサービスしといてあげるよ。ただ次からは部屋にいない場合は食事の時間までに食堂に来ないと出さないからね、時間の方はカウンターのところに張り紙があるから後で見といてね」

「分かった」

「取りあえず説明はこんなとこだけど何か質問はあるかい？」

「この街の詳しい情報はどこで聞ける？」

「情報ならやっぱり酒場じゃないかい？」

酒場は出来るだけ行きたくないな、絡まれたら酒場ごと消し飛ばしてしまえそうだ

「それ以外ではあるか？」

「そうだね・・・」

おばさんは少し考えた後、

「金はかかってもいいなら道具屋に行ってみな、
そのウンジャで奴なら大抵のことは知ってると思うよ」

ふむ、情報屋か、酒場で聞くよりはずっと効率よさそうだな

「どこにあるんだ？」

「大通りから小道にそれたところだよ、来たばかりの人は
まず迷うだろうから食事の時に地図書いて持って来るよ」

「ありがとう」

「じゃあね」

そう言っておばさんは通路を戻っていった

それを確認してから部屋に入る
ふむ、まあ広さはこんなもんか
部屋の確認もそこそこに俺は2つあるベッドの一つに
担いでいた荷物をゆっくり降ろした

宝物庫のおっさんのマントで包まれた荷物
それをとると、中からはさっきの女が出てきた
先程よりは顔色も幾分かは良くなっており
呼吸も落ち着いている、今は眠っているようだ
女に毛布を被せておく

解呪後の問題はなさそうだ、後は少しずつ良くなっていくだろう

「さて、飯食つたら早速行動開始と行くか」

そういつつ俺も自分のベッドに腰を下ろす
そして先程のことを思い出していた

あの後俺は蔵書から取り出したのは
宝物庫にあった物だ

・闇祓いの数珠

・これを身に付ければどんな呪いも跳ね除けることが出来、
使えばどんな呪いも解呪することが出来る

・解呪した呪いは数珠の珠に蓄積し、それをかけた本人の前で割ると
呪いはかけた本人に還って行く

・珠は時間が経てば減った分は補充される

・珠の数は百八個

コレを使って女の体に憑いていた呪いを祓った

使った途端女の体からどす黒いもやのような物が

大量に出てきて数珠の珠の一つに吸い込まれていった

その後女は僅かに残っていた意識を失ったが顔色は明らかに先程よ
りも

良くなっていた。なので連れて行くこととしたんだが・・・

気を失っている女を抱えて街に入れば間違いなく怪しまれる

下手したら即捕まりかねん

仕方ないのでマントで覆い隠して担いで運んできたというわけだ

まあいきなり部屋に二人いたらあのおばさんも怪しむかもしれないが
あの人なら説明すれば理解してくれるだろう・・・多分

さて、飯まで少し時間あるだろうし今のうちにやることやっておくか

俺は女のほうに視線を向けた

第十六話 余計なお世話だ、マジで

やること済ませて飯食って（おばさんは女を見て特に何も言わなかった）

あれか、『ゆうべはお楽しみでしたね』とでも思ってたのか
いまは夕方だっつーの

地図に書いてある道具屋に向かう

くろごまは今回部屋に置いてきた

悲しいがあいつがいると目立ってしまうのと女の護衛が必要だったからだ

果物は置いていったから食事には困らないだろう

くろごまにはおばさん以外の侵入者が来たら建物に被害を

出さないように消せと言っておいた

元気に返事をしてくれたから大丈夫だろう

その時の可愛さに思わず5分程ナデナデしてしまった

大通りで俺がくろごまを頭に乗つけてるのは

結構見られてるから、目立たないようにおっさんマント

を頭から纏って宿をでた

大通りからそれた道に進んでいく

そう人通りの少くない場所にその店はあった

少し他と違った造りの家

ただ、出来て結構な年月がたってるのか少しボロイ印象を受ける

ドアノブには「営業中」と書かれた札がぶら下がっていた

ドアを開けると少し暗めの部屋に所狭しと色々な物が置いてあった
ガラクタみたいなのも有るけどこれも売り物なんだろうか？

「いらつしゃい」

そう思っているとおのカウンターから声をかけられた
視線を向けるとおっさんが椅子に座りながら頬杖ついてこつちを見
ている

「何か欲しい物でもあるのかい？」

「知りたいことがある」

「なんだ、そつちの客か」

そつちとおっさんはカウンターから出て俺の横まで来てドアを開け
「営業中」の札をひっくり返して「休憩中」にして、ドアを閉めた

「さて、で、何が聞きたいんだ？」

おっさんはカウンターの中に戻りながら尋ねてくる

「この街で荒つばい方法で奴隷を集めてる奴の事と
王族クラスの姉妹が行方不明になった国がないかの二点」

「ふーん・・・それなら5000でどうだ？」

おっさんは最初の時と同じようにカウンター内の椅子に腰掛けて
頬杖ついてこつちを見る

俺はポケットに手を突っ込みおっさんに向けて親指で弾いた

おっさんはそれを片手でキャッチする

「ほう・・・」

「釣りはいらん、そのかわり・・・」

「分かってる、出し惜しみはしないしあんだの事は誰にも漏らさない、

それでいいかい？」

俺が出したのはG5貨、つまり1万Gだ

こういう商売人相手だと最初にケチるとろくな事にならん
まあ宝物庫にG5G6貨は大量にあったしケチる必要もないんだが

「ここで話をすれば外の奴に聞かれるんじゃないのか？」

「それは無い、この家は音を外に漏らさない造りになってる、
その辺は考えてるよ、信頼が大事だからね。ちなみにドアの
札ひっくり返すと外からは開けられない様になる」

防音設計なのかこの家、ファンタジーでもそんな家あるんだな

「さて、んじゃ本題に入ろう」

おっさんは胸のポケットからメガネを取り出しそれを付けて
両肘をカウンターに着け顔の前で手を組みながら話し出す

「この街で裏の奴隷商人は一人しかいない、レッペっていう奴だ」

奴隷になる人間は大抵金が絡んでいる

生活が苦しくなり親が子供を売る

借金のかたに身売りする

他にもあるがその辺の人間を扱う奴隷商人は結構普通にいますしそれは法でも認められている

ただ表があれば当然裏もある

珍しい種族や身分の高い者など、高額になる商品を
非合法な方法で売買する奴もいる

「どんな奴だ？」

「金のためなら何でもかんでも……っっていえばわかるだろ？」

まあ当然だろうな、そういう性格じゃなきゃそんな商売しないだろう

「そいつの店は？」

「ちょっと待ってな……えーっと……あつたあつた」

そういっておっさんは奥のガラクタを漁ってこの街の地図を持ってきて

カウンターの上に広げた

「ここだ、裏通りの一軒家、だけど実際は地下にただっ広い部屋があつて、奴隷を管理してる」

そういって地図上の一点を指差した

街の端っこの細い道を何本も進んだ先、

確かにこんな所でもないとな商売できねえだろうな

「ただ、当然普通の奴は入れないようになってな、常に入り口に見張りがあるんだよ、入るには見張りに『海ウサギは元気か？』て言いな、それが合言葉になってる」

ただ見張りの奴も主人に似て欲深い奴が多いからな、初見の奴ならいくら握らせないと入れてくれんと思うぞ」

「奴隷の人数はどのくらいいるんだ？」

「50はくだらないと思うぞ、結構な身分の奴や希少種族も扱ってるらしいぜ」

ニヤリと笑う

こっちの目的に目処がついてるんだろう

おっさんが笑うな気持ち悪い、豆腐の角に足の小指ぶつけて死ぬ

「にしても、犯罪しまくってるのに捕まらないんだなハロー石ですぐわかるんだろ？」

「あんなもん何の抑止にもなっちゃいないさ、いくらでも誤魔化す方法がある、誰もあてにしちゃいないさ」

「へえ」

まあどの世界でも犯罪者つてのは法の目潜ってんだし珍しい事ではないのかもしれないな

「話がそれだな、んでもう一つの方についてだが

その後も幾つか話を聞いてから店を出た

地図は頭に残ってるので目的地にはすぐ着いた

予想通り大通りからかなりの距離がある

日はまだ落ちていないのに路は薄暗く、空気も濁ってる感じがする

例の建物の入り口には情報どおり見張りのような男がいた

いかにも下っ端っていつ感じの筋肉質にスキンヘッドの

男が扉に寄りかかっていた

俺と目が合うと

「何だニイチちゃん、痛い目合いたくなくなったらさっさと消えたほうがいいぜ」

とほざいた

ああ、昔いたな、同じような事言った奴、言った瞬間腕の関節逆に曲げて

両足縛って樹海に放り込んだな

俺はそいつに近づいてG5貨を一枚握らせ

「海ウサギは元気か？」

合言葉を伝えた

男は俺が渡した硬貨を見ると

「・・・はいんな」

そう言ってドアを開けた

ああ、なんかもうくろごま触りたくなってきた
そう思いながら俺は奴隷商人の店に入った

第十七話　なんでキラキラする服を普段着にするの？　（前書き）

十二話の改訂をしました

くろごまの外見についてのところです

あと今まで感想の設定がユーザーからのみになってました

バグなのか分かりませんがユーザーからのみか

受け付けないか、しか選べませんでした

制限無しに直せましたので誤字脱字などございましたら

ぜひご連絡ください、よろしく願います。

第十七話　なんでキラキラする服を普段着にするの？

入って見張りの下っ端に奥の部屋に案内される

そこには一人のばあさんが椅子に座っていた

趣味悪い格好だなおい、大阪のおばんか貴様は

無駄にキラキラした服装をしており、この部屋も家の

外装と他の部屋にはそぐわない豪華そうな置物や家具が置かれていた

下っ端はばあさんになにやら耳打ちしてから部屋のドアを閉め、

入り口に戻っていった

「いらつしゃい、言葉知ってここに来たってことはそういっお客様と考えるといいんだね？」

座りなよ、とばあは自分の座ってる椅子の向かいに俺を促す

こちらを値踏みするような目で見ながら無愛想な顔をしている

俺は椅子に座り

「ずっと欲しかった奴がいたんだが、そいつが身分のある奴だったんで

あきらめてたんだ、だが少し前に攫われて奴隷になっただけで聞いてな、

あちこち探し回ってたときに伝手でここに居るって聞いてな」

「そうかい・・・でも分かっているとと思うけどここで取り扱ってるのはそんじょそこらのとはわけが違うよ、当然価格もね」

要するに金持ってたんだろうな、と言いたいらしい

余り金持つてるように見えなと思われたんだろう
人を外見で判断するとは二流だね

俺は持っていた袋の口を開け、机にだす
その時の衝撃でぼふっという音がした
予めここに来る前に本から出しておいた物だ

「取りあえずこんだけ持ってきたが」

ばばあは目の前に置かれた袋の中を見る、そして
さっきとは打って変わってばばあは気持ち悪い営業スマイルを始める

「お求めの奴隷の名前は？」

「アーシェだ」

「分かりました、少々お待ちくださいな」

そういつてばばあは立ち上がり部屋を出て行った
言葉使いまで変わってやがる
いやあお金って恐ろしいね、人をあそこまで変えるんだね
まあばばあが態度を変えた理由は別にあるけどな

にしても客に茶もださねーのかよ、なつてねー店だなおい
まあ入り口の下端といいばばあといきそうに気回る
奴がいねえんだらうな

しばらく待っているとばばあが戻ってきた

後ろには一人の女を連れていた

燃える様な赤いロングヘア、ただあの女と違って

ウェアブがかかっている

服装は思ったよりひどい物ではなくパジャマっぽい
大事な売り物だしその辺は考えてるのかもしれない
服の上からでも分かるくらいスタイルがいい
やはり血なんだろうか、なんでそんなにでかいんだ

「お待たせいたしました。当店の商品でアーシエと言う名の者は
こちらのみとなっております」

「・・・」

アーシエと言う女は顔を俯けて無言でいる

まあ当然か、いきなり攫われて奴隷にされて売られそうなんだ
笑顔になれってほうが無理だろう

先に聞く事が有るのであれば先に顔を向ける

「手は出していないだろうな？」

「それはもう、大事な売り物ですから」

俺は女に視線を向け、

「・・・ふむ、確かに似ている・・・だが念の為少し確認したい事
がある

悪いが5分程二人きりで話をさせてもらいたい」

「それは・・・」

「こちらとしても高い買い物になるんだ、用心する気持ちは理解
してもらいたいな、万が一ということになったら目も当てられん。

何、少し話をするだけだ、彼女には一切触れない事を約束する」

ま、こんなところで約束なんて言ったって何の信用にもならんだろうけど

ばばあも上玉の客をつまらん理由で逃がすような事はしないだろう

「・・・分かりました、では5分をお願いいたします」

そう言っただけは部屋を出てドアを閉める、部屋には俺と女だけになった

女はばああの座っていた椅子の横で立ったまま相変わらず下を向いている

俺は部屋の外で聞き耳立てているであろうばあに聞こえないくらいの

声で話し始める

「今聞いたとおり余り時間は無い、質問に答えろ」

「・・・」

返事が無い、ただのハーレム要員のようだ

まあいい、さっさと用件に入るか

俺はポケットに手を突っ込み

「コレに見覚えはあるか？」

それをテーブルに出す

女は俯きながらちらりとそれへ視線を向け

「・・・え」

顔を上げ俺の前で始めて声を出した
やはり美女か、イケメンのハーレム要員か
今度あつたら確実に鼻の穴3つにしてやる

「な、なんでそれをも「質問に答える」」

時間が無いっていつてるだろーが、
具体的に言っとカラータイマー点滅しだしたウルトラ男並みに
時間ねえんだよ、光線出して締めないと後が無いんだよ
がけっぷちなんだよ

「・・・はい、あります」

「どうで？」

「・・・それは元々私の物です」

「証拠は？」

「それは特定の人間が触ると淡い緑色に輝くんです
私以外の人が触れても何も起きません」

俺が女に見せたのは象形文字の様な模様がついた銀色の指輪^{リング}
姉の方が首にぶら下げていた二つのうちの一つだ
あいつが寝てる時にこれを拝借した

理由は妹を見分けるためだ、姉の所持品を見せれば何かしらの反応を起こすだろうと思った

それで何か良い物はないかと見ていたらコレが目に入った
見た目は何の変哲も無い唯のリング、だがそのうちの一つは
淡い青色の光を放っていた

気になってそのリングを手にとると途端に光を失った

そして姉に戻すと再び光りだした

恐らく特定の人間に反応して光る物だろう

もう一つのほうは全く光を発さない

とするとこちらは妹の物である可能性がある

妹を見極めるためにこいつが所持していたと考えられるからだ
外見がいくら変わってもコレを使えば確実に分かるからだ
もし違っていたとしてもリングの特徴について

知っていれば可能性はある

そう判断して拝借してきたというわけだ

そして先程情報屋にコレについても聞いてみたところ

極めて高価な代物でコレを最初にはめた人間が付けなければ

リングは光を発さないという物だった

さらに作られた数とこのリングの存在を知っている人は極めて少なく
発する色とリングの装飾が全て違う、との事

恐らく特注品ということなのだろう

さらにこいつらの”境遇”の事を聞き、ほぼ間違いないと確信した

これで光の色を知っている事、触れてその色に光る事
の二つが確認できればそれは本人確定だろう

リングが光る事を知っているが

リングに触れても光らない、色を知らない場合は

妹本人でリングは別の人間の物、もしくは全くの別人の2つの可能

性がある

その時は姉の事について質問すればいい
外見、もしくは姉のリングの光の色について聞けば分かるはずだ

そしてこのパターンは最も分かりやすい方だ
なら後は簡単だ

「手を出せ」

そう言うと女はゆっくりと両手を出す
俺はその手のひらにリングを置いた
すると銀色のリングは淡い緑色の光を放ち始めた
どうやら間違いないようだ

さて、んでは締めのお仕事に入るかな エへへ
俺はリングを取り上げた

「あ……」

「心配するな、後でちゃんと返してやる」

「え……それはどういう」

女が言い終わる前にリングをポケットにしまえばあを呼んだ

「いかがでしたでしょうか？」

「ああ、間違いなく探していた女だった」

「それはよろこびました、私どももうれしく思います」
はっ白々しい

「それでいくらだ」

「左様でございますねえ・・・」

ばばあは袋に視線を向ける

欲深ばばあが、頭の中透けて見えるぜ
俺は袋の口を握って言った

「今日の俺は気分が良い、目的の物も手に入り、良い店も
知る事ができた、それにこちらの我俣も聞いてくれた事もある、
この中身すべて持って持っていいぞ」

「ひっひへっ!?!」

「まさかこれで足りんというのか?」

「いついえいえいえいえ滅相も無い!!!
しっしかし・・・本当によろしいので?」

「言っただろう、今日の俺はとても気分が良い、
探していた物と良い店の二つが見つかったのだ
コレは今後とも良い付き合いをしたいという俺の気持ちだ」

「は、はい!そういうことでしたら喜んで!!!」

「ただ、一つだけ条件を飲んで欲しい」

「何でございましょう?」

「これは全うな方法で手に入れたものじゃなくてな、
万が一にも足がつくのは避けたいのだ、この気持ちは
理解してもらえと思うが?」

「・・・」

無言は肯定ととりそのまま話を続ける

「なに、簡単な事だ、この中身はすべて渡す、

その代わり契約書に俺の名前と金額を記入しないで欲しい」

「つまり契約上は譲渡という事になるわけですね?」

「ああ、そうすれば万が一契約書を見つけれられても
言い逃れが出来るからな、名前の方は事が露見しそうな時に
適当な名前を書けば別の人間に罪を押し付けられる」

「かしこまりました、それくらいならばお安い御用でございます
では、契約の用意をしますので少々お待ち下さいませ」

そう言っただけはあはニコニコしながら部屋を出た、
くくく、笑いがとまんねえなおい
気持ちを押し隠しながら女の顔を見る

女は複雑そうな顔で俺を見ていた

第十八話 決め台詞を言う時はみんな静かにしよう（前書き）

またまた改訂です、四話のジョブの部分を直しました

後、前回も言いましたが一応もう一度、

十七話投稿直後までなぜか感想受付が

ユーザーのみか受付しない、しか選べませんでした

制限無しに設定できましたので

誤字脱字、感想等あればよろしく願います

第十八話 決め台詞を言う時はみんな静かにしよう

奴隷の契約方法はさして難しい事ではない
奴隷となったものには首に奴隷用のチョーカーを着用する事になっ
ている

そのチョーカーと対になるカードを所有している者が主人となる
カードは蔵書のように持ち主が自由に出し入れできる
奴隷はカードの所持者に危害を加える事は出来ず
命令には絶対服従である

奴隷は自身のカードに触れる事とカードを損傷させる行為は出来ない
ただチョーカーをつけただけでは奴隷にはならないようになってい
る
当然だ、そんな事になったら隙見せたら誰に奴隷にされるか分からん
正規の手続きを踏んだ上で、本人が奴隷になる事を了承しないと奴
隷にはならないのだ

まあ罪人が奴隷になる時は別だけど

あのばあは恐らく手続きの部分をお偉いさんに
金を握らせるなりして処理しているんだろう
あとは裏のやり方についての隠蔽とかもな
そして攫ってきた人間はあの手で無理やり了承させ奴隷にする
形としてはそんな所だろう

しばらくするとばあは契約書とカードを持ってきてそれを
テーブルの上に置いた

「こちらが彼女のけいや・・・いえ、譲渡書でございます

一枚はこちらで、もう一枚はお客様にお渡ししております」

書類には彼女の名前と売り手側が書く売買同意欄にサインが書かれており、

二枚とも金額、売った相手の欄は空白になっている

「ああ、分かっている」

俺は書類の一枚を受け取る

「そしてこちらが彼女のカードでございます、どうぞお持ち下さいませ」

俺はカードを受け取る、カードにはアーシエと書かれていた。

確認の為に彼女にカードを近づけるとカードは彼女から3センチ程の位置で

動きを止めた、磁石の同極が反発し合う感じに似ている

「確かに」

そして消えるように念じるとカードはふっと消えた

「それにしてもこんな一軒家で奴隷を扱っているとな、

これでは奴隷に逃げられるのではないか？」

「それはありえませんが、奴隷は地下に置いてあります

その地下の入り口、地面壁面天井全て極めて頑丈に作ってあります
大地震が起きても全く地下に被害は及びません」

「成る程な、まさに金庫というわけか」

「はい、左様でございます」

ばばあはニタリと笑う

だから気持ち悪いんだよ

なんでおっさんやばばあの笑顔ばっか見なきゃならんのだ

まあ今の聞けて俺も笑いをこらえてるんだけどな

「良く分かった、では約束通りコレは置いていく、
今後とも良い付き合いをしたいものだ」

無論袋の事である

俺は立ち上がり部屋を出る準備をする

「はい！それはもう！またのご来店をお待ちしております！」

「行くぞ、付いて来い」

「・・・はい・・・」

俺は女を連れ部屋を後にする

アーシエは俺の三步後ろをついてきていた

それにしてもこの家、あの部屋以外ホント何も無いな

多分必要な物は全てあの部屋に集めているんだろう
だからこそ都合がいいんだが

そして俺達はばあハウスを出る

家の中では分からなかったが辺りは薄暗くなっていた

入り口にはさっきの下っ端がいた

「へへへ・・・ぜひまた御来店を」

気持ち悪い、せめて営業スマイルくらいできるようにしろ

「ああ、悪いが一つ頼まれてくれるか？」

「へい、何でしょう？」

「生憎明かりになるものを持ってくるのを忘れてな、何か店主から火を貰ってきてくれんか？」

「かしこまりやした、少々お待ち下さいませ」

そういつて下っ端は家の中に入る

それを見届けた後

「いくぞ、急げ」

「え・・・あの・・・」

俺は女の手を握り駆け足でばあハウスから離れる

女は当惑した顔をしながらついてくる

細い小道を幾つも進む、

この程度の暗闇なら暗視ゴーグル無しでも余裕で行ける
俺の夜目の良さは梟を凌駕するのだ、たぶん

家から十分距離が出来たところで速度を緩める
ここまで来ればいいか
そう思っているとアーシエは口を開いた

「あ……火を借りるのではな

」

ドンッ！！！

ドガンッ！！

ドゥン！！！

が、その声は凄まじい爆発音によってかき消された
音のするほうはばあハウスがある方角だ
いくつも小道を進んでいたのもう家は見えないが
家の方の空が赤くなっていた

アーシエはばあハウスのほうに振り返る

距離があるから分かんが家吹っ飛んでるんじゃないかねーのになってぐ
らいの音

当然ばあも はっ、ざまあ

よし、あのセリフを言うチャンスだ

「汚ねえは「あれは・・・あなたがやったのですか？」」

言えなかった、言わせてもらえなかった、悲しい

こんな時にくろごまがないなんて

神はなんて殺生なんだろう

まあ俺は無神論者だけど

にしても奴隷っぽくない聞き方だな

まあ仕方ないか

そして再び宿に向けて歩き出す

「んな分けないだろうが、どうせ火の不始末とかだろ
全く怖いねえ、火つてのは」

そう言いながらずんずん進んでいく

そう、正確に言えばアレを起こしたのは俺じゃない
ま、準備はしたけどね

ばばあに渡した袋、アレには二つの物が入っていた

一つは金色に塗装した細長い木の箱をたくさんと

幻覚効果のある粉末だ

これは空中に舞うと長時間辺りに漂うものだ、

幻覚といってもロープレで言う回避確率を多少上げる
程度の呪文と同等と思ってくれればいい

全く違う物に見せる程の効果は無いが、似ている物に見せかけるくらいなら出来るのだ

最初あの袋をテーブルに置いた時、衝撃でぼふっという音と共に中の粉末が舞ったのだ

ばばあはそれを埃か何かと思い、多少は手で払ったが完全に払えるわけも無く

吸い込み、その後中を見た

幻覚にかかっているばあには木の箱が大量の金の延べ棒に見えたのだらう

この世界でもやはり金は価値があるものらしい
金の価値はどの世界でも共通ということか

ちなみに金の延べ棒を模したのは理由がある

宿のおばちゃんが言っていたことを覚えているだらうか

貨幣には魔法がかけられており、見る、若しくは触れば簡単に見分けることが

できるようになっている、つまり貨幣に模した物では幻覚をかけても見破られる

可能性が極めて高い

ならば他の物はどうか、と思つたわけだよ

案の定、金、銀、レア鉱石のような価値の有る物でも魔法はかけられていないと

おばちゃんは言っていた、あくまで貨幣のみだと、そこで白羽の矢が立ったわけだよ

ちなみに木の箱には小麦粉と爆薬が詰まっており、ばばあが部屋を出た時に

小麦粉のほうを取り出し部屋に撒き散らしておいた

あの下つ端もばあも部屋にいる限り幻覚にかかり続け、小麦粉が舞っている事と

箱の事には気づかない。

後はそこで火が着けば粉塵爆発の条件はクリアって状況にしたただけだ
火薬も大量にあるから規模はかなりのものになる

「・・・この為にあのような事を持ちかけたのですね」

あのような事とは契約書のことだろう

当然だ

アレだけの爆発が起きれば騒ぎになる

いくらお偉いさんがバツクにいてもコレだけの事になれば
隠し切るのは無理だろう

そうなれば非合法の奴隷売買が公になり、

ばあが生きていたとしてもお縄になる、生きてるとは思えんが

そしてばあは奴隷のいる地下は頑丈に出来ていって言うていた

つまり建物が全壊するほどの爆発が起きても地下の人間は無事という事だ

そして調査のメスが入れば彼らは当然見つかり開放されるだろう

そしてばあが今まで取引した契約書が見つければそいつらにも捜査の

手が伸びる、契約書が金庫に入っていて無事な可能性は十分ある
だが俺の場合は自分の名前も書いてないし金額も記載されてない
証拠は全く残っていないのだ

バーローでも俺が犯人とは分からないだろう

それを全て理解した上で言っているんだろう

聞いてた通り頭が切れるな

「ですがこれで犯罪者になってしまつのでは？」

「ならないよ、絶対」

俺は一言もばあに金の延べ棒とは言っていない袋の中の物と行ってただけだ
それに火薬や小麦粉を用意したが火をつけたのはあいつら自身俺に責任はない

そもそも犯罪者のW Kを付けられるには懸賞金をかける人間がいなければならぬ被害にあつた人間がそれを専用施設に訴え、施設が報告について調査し、犯罪者と認め被害者が懸賞金を用意してから初めてなるのだ
仮にあの家の奴隷以外の人間が生き残つていたとしても自分達の商売自体が違法なんだから俺を犯罪者にしようものならその前に自分達が捕まる

つまり今回の件で俺が犯罪者になる事は無い

そして宿に戻ってきた

来る途中で結構な数の野次馬が各建物から出てきてばあハウスのほうを見ていた

俺達は怪しまれないよう遠回りをして違う方向から大通りに出て、そいつらの隙間を縫うように宿に戻ってきた

ドアを開けると最初の時のようにカウンターにおばちゃんがいた

頬杖ついて入り口のほうを見ていた

「随分大きな音がしたけど外で何かあったのかい？」

「わからんが街の隅のほうの空が赤くなっていた、
火事か何かだと思う」

「ふうん、火事ねえ・・・」

そう言っておばちゃん後ろにいる女に視線を向ける

「部屋移るのかい？」

「いや、今のままでいい、最初に言った人数以上には増えない」

「そうかい、食事をそろそろ持っていくと考えてたんだ

丁度よかったよ」

「なら30分後くらいに持ってきてくれ」

そう言っただ鍵を受け取り部屋に向かう

多少の明かりはそこらにあるがやはり暗い

人気の無いところにある電信柱についてる蛍光灯を思い浮かべてく
れればいい

足元に気を付けつつ部屋の前に来た

鍵を開け少しだけドアを開ける

「くるごま、俺だ」

そういつとくるごまはドアの隙間からぱたぱたと飛んできて
そのまま俺の顔にへばりついた

「ぎゅっ」

嬉しそうにへばりついてくるくるごまを猫のように首後ろをつまんで
そのまま頭に乗せる

うむ、癒される

もう何年も会ってなかったかのような

やはりお前がいなかつたものがあるよ

「子龍？・・・でもその外見は・・・」

アーシエは何か呟いていたが無視してリングと部屋の鍵を渡した
リングは途端に輝き始める

さつきリングを渡さなかつたのは単にばあに取られる可能性があ
つたからだ

「これを持って中に入れ、中に入ったら1時間は部屋を出るな、
ついでに窓から外も見るな」

「え、あ、あの・・・」

「中に入ればやるべきことは分かる」

それだけ言ってアーシエを部屋に入れドアを閉めた

ここから先の事は部外者が立ち入る事じゃない

命令もしておいたから俺を追うことは出来ないだろう

俺はさつさとその場を後にした

階段をおりカウンターに行く

「おや、どうかしたのかい」

「部屋には俺の変わりにさっきのが連れと一緒に居る

払った分の期日はあいつらを泊めておいてくれ、無論食事もな

それからあとで食事を持っていくときにコレを渡しておいてくれ」

そう言っておばちゃんに包みを渡した

中には大臣の部屋からパクっておいた質の良い女性用の服と履物

大方愛人へのプレゼントとして用意しておいた物だろう

紫を基調とし花柄模様があしらった着物の様な外見だが肩から二の腕に

かけての袖は無く肘から手首には袖がついている

袖と着物はセットになっているものだ

下は大正時代の女性が着るような黒く、長いスカートっぽいものだ
履く者も舞妓さんの下駄のような物を入れておいた

アーシエの着ている服であいつがあそこにいた奴隷だとばれる可能性
がある、

なのでこいつを渡しておく必要がある、あの格好では色々不便だろ
うしな

サイズのほうは多少は違うだろうがその辺は我慢できるだろう、胸
囲とか胸囲とか

あいつも姉に会えた以上面倒ごとに巻き込まれるのはごめんだらう
ついでに多少の金も入れておいた、縁切りのつもりで

「ふーん・・・」

おばちゃんは包みを受け取ってから何故かこつちをじーつと見てくる
そして、

「あんだ、良い男だね」

そう言った

何言ってるんだろう、当然だろつそんな事は

俺は何時だつて超絶良い男だ

右の頬を打たれたら槍で地獄突きするくらい良い奴だ

無言でおばちゃんに背を向け宿を出て、夜のログスの街に歩き出す
そして俺はカードが出るように念じ、出てきたカードをパキリと割
った

カードは途端に砂のようにさらさらと音を立てず消えていく

カードとチョーカーは対になっているのは言った、がその関係は

カードが本体でチョーカーは端末という感じだ

カードが壊れればチョーカーも消滅する

つまり奴隷で無くなるというわけだ

今頃アーシエのチョーカーも消滅しているだろう

後はコレを処分すれば証拠は一切無くなる

俺は譲渡書をポケットから取り出し、丸めて上に軽く投げる

「ぎゅ」

それが頭の上辺りにまで上がった時にくるごまがボツとちいさい火
を吐き

譲渡書は灰になった

それを足で踏んでぐしゃぐしゃにして

「さて、別の宿を探して今日は寝よう」

夜だというのに外の野次馬は増えていた

そいつらにまぎれて俺はその場を立ち去った

第十八話 決め台詞を言う時はみんな静かにしよう（後書き）

今までのに比べてかなり長くなりました
なので妙な所があるかもしれませんが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4287z/>

さあ人生を楽しもう

2012年1月10日00時48分発行